

---

# 俺がここで生きるわけ

tyimo

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺がここで生きるわけ

### 【Nコード】

N3578Y

### 【作者名】

tyimo

### 【あらすじ】

いきなり、異世界へと飛ばされた青年は何を見何をなすのか。主人公最強系です。シリアス有り、コメディー成分少々？で行こうと考えてます。

いつかの日に・・・

「しらない天じよ・・・なわけないか」

見知った宿の天井を見ながら起き上がる。その部屋は8畳ほど大きな二人部屋でシングルサイズの木で出来たベット二つに小さな四角いテーブルと木製の丸イス、あとは荷物をしまふ鍵付きの戸棚しかない。

ここに来て、はじめての冬がまもなく終わろうとしている。この世界にきてはや8ヶ月、最近はやく落ち着いてきた。といっても、いまだ知らない事の方が多いし何よりこの世界<アルベリアン>のをすべて見て廻ったわけでもない。まあ、この広大な世界を徒歩で廻ろうとすれば、死ぬまで続く旅になりかねないし、それですら終わるかどうかわからなのだ。今のところ、する気はないが。

そういえばと、隣のベット見ると分厚めの布に包まる様にして熟睡する相棒がいた。もうそろそろ、1階の食堂が開くころだと時計に目線を送り、<6時42分>と表示されているのを確認すると、相棒をたたき起こす為にベットから立ち上がり相棒が包まっている布に手をかけ、一気に剥ぎ取る。

そこには、輝くような金色の髪と色素の薄い年齢相当の(16歳らしい)うつすら微笑みを浮かべているような愛らしい顔が見える。窓から差し込む光から逃げるように寝返り打ち、うっうっ唸っている。野宿しているときにはすぐ起きるのにと、内心ため息を吐きつつ肩を揺らす。

「起きろ〜朝だぞ〜」

「あ〜さ〜なの〜?」

少し薄目を開けつつこちらを胡乱な目で見てくる。少しつり上がった目元、藍色というより空色に近い瞳は視線を彷徨はせつつ、間延びした声で聞いてくる。

「ああ、朝飯の時間だ。ほら、さっさと着替えて顔洗いに行くぞ」  
手ばやく着替えてタオルを肩に掛ける。そのまま部屋を出て廊下を右へ、階段の方へと狭い通路を歩きそのまま1階に下りるとバツタリと宿の女将さんと出会う。

「おはようございます。井戸借りますよ」

「ああ、おはよう。もうご飯出来てるから」

「今日の朝飯はなんですか？」

「昨日、あんた等が取ってきた肉あったろ？晩飯には間に合わなかったからね、そのぶん下ごしらえに時間掛けたから自信あるよ」

「そうなんですか？それは、楽しみですな」

「あれ？ユウもう顔洗ったの？あ、女将さんおはようございます」  
メイが階段から降りてきた。もうすっかり目ざめたようだ。綺麗な金色の髪は肩の辺りで少し跳ねてしまっているが、いつもの事なので気にしない。最終的に三つ編みになってしまっしな、だからと言って別に三つ編みも嫌いじゃ無いが。

「おはようメイちゃん。ほら、あんたも顔洗つといい」

はいと返事して裏にある井戸にメイと向かう。ここでは水道なんて無い、昔ながらの滑車式の井戸だ。紐付きの桶を井戸に落とし引き上げる。たらいにそそぎ、顔を洗う。かなり冷たい、しっかり洗うと指先の感覚が無くなってきた。さっさと切り上げてタオルで拭く。隣で顔を洗っていたメイが寒い寒いと手に息を吹きかけている。俺も寒いので、早く中に戻ろう。

食堂に入りカウンタで朝飯を貰い、席についていただきますと呟く。今日の朝ごはんは昨日狩った牛系の魔物<ヘイバファロー>と言う魔物で、見た目が醜悪な割りにその肉は美味という物だ。数日前から近くの草原に出没し討伐依頼が出ていて近くを通ると無条件で襲ってくる。敵が強かろうが弱かろうがお構い無しって言うのは、魔物とはいえ動物なのだからどうなのかと。その群れを狩った俺たちは角や皮、そして大量の牛？肉を剥ぎ取り、帰って市で皮と肉の大半を売り払うと、その足でギルドの支店（酒場に併設されている）に向かい依頼達成条件の角を出して賞金を貰ったのだった。――かなり説明くさくなってしまったが（しかもかなり端折ってだが）《、そんなことより飯、飯。パンとスープ、あとサラダに塩、胡椒の利いた肉が山盛りになっている。かなりおまけして貰えた様だ。こつてりとした肉と、サラダが箸休めと（ナイフとフォークだが）なっていていくらでも食べられそうだった。たらふく食べてハーブティーを啜っていると黙々と食べていたメイが食べ終わったようなので話しかける。

「今日はどうする？また、討伐系探すか？」

「うーん、それも良いけど。もうそろそろ春になるでしょ？だから、今後の移動も含めての情報を集めましょうよ」

「そうか、後3日もすれば暦の上では春だもんな」

たしかにまだ朝晩は寒いが日中はだいぶ暖かくなりつつある。旅の再開を考えなきゃならん時期だ。そのためには情報が必要で、聞くのは商人、それも旅商人がいい。そう考え頷きながら答えた。

「っで？次の目的地はどこなんだ？」

次の村か街かは知らないがどの位の日数が掛かるかで準備すべきものも変わってくる。と言っても、見た目は軽装の旅人な感じになるだろうが。俺が持っているショルダーバック、見た目は小さいが、空間魔法が掛かっていてかなりの収納能力を持っているから運ぶのは簡単だ。ちなみに、メイも同じようなものを持つてる。結構な値段がしたが、かなり便利なのでしょうがない。必要経費という奴だ。

「ねえ、聞いてるの？ポーっとしちやってどうしたのよ？」

「いや、なんでもない。っで？なんだっけ？」

「は〜っ。もう、もう一度言うからちゃんと聞いてよ。次の街は、<リギンガーデン>って言うところ、この、<サムズの村>から歩いて4、5日ってとこなだけど」

ちなみに、サムズの由来は初代村長との事。前に女将に聞いたんだが、村の場合、村長の名か特産品の名が多いらしい。

「そっか。んじゃ、とりあえず市に行くか」

「うん、それじゃ行きましょ」

そう言ってメイは立ち上がり皿をカウンタのほうに持っていく。俺もそれに倣い皿を返すと部屋に戻り一応装備を整え、っといつても剣を背負ってベルトを止めただけだ。メイも準備が出来たようなの

で、外に出る。宿の前の赤茶けた道を左に行つた先に小さいながらも広場があり、そこに3軒ほどの露天がある。そこで情報収集と云うわけだ。露天は木と布でできた壁の無いテントといった感じで、保存の利く食料品やら布やらを扱っているのだ。

「よう、おっさん久しぶり」

「おう、坊主たちなんか欲しい物でもできたか？」

「まあね、保存食ある？あと、リギンガーデンについてなんか知らない？」

「保存食ならこれがお勧めだな、リギンガーデンか・・・あそこは特に無いが、そういえばそこに行く道中に盗賊が出たって話を聞いたぞ」

「じゃあ、それを一週間分もらえますか？あとそれは、いつごろの話なのですか？」

メイが身を乗り出した。まあ、盗賊などどこにでもいるもんだが。メイは正義感がやたら強くその手の輩に容赦しないからな。もしあったら、間違いなく血祭りだろう。「合掌」

まあ、俺もかかってきたら容赦はしないがww

「あいよ！銀貨6枚と貴銅貨3枚だな、あんがとよ。だいたい、4日位前だな。襲われた奴が言うには、いきなり奇襲されたんだが何にも取られなかったと、だが矢が飛んできてすぐ横に刺さったときは死ぬかと思つたぞうだ」

「それでも、何も取られなかったって運がいいな。はいお金」

シオルダーバツクから皮袋を取り出しお金を払う。

「ほんとにね、奇襲で逃げられるなんてよっぽど弱い奴らなのね」  
ちよっつメイお前ひどww

「ほらよ！なんか最近こつちに流れてきた連中らしい。そういや、  
リギンガーデンの事聞いてきたって事は行くのか？」

「ああ」

「ええ」

「そうか、気をつけるよ。って言ってもお前らには必要ないな」

そう言っつてガツハツハと笑うおっさん。

「気をつけますよ。俺は何事も慎重にがモットーですが」

「でも、あん時はずいぶん豪胆だったじゃねえか」

「それは、何度も言っているようにメイの奴が飛び出して行っちま  
ったから仕方なくですよ」

「なんだかメイがこちらを睨んでいるが気にしない。気にしちゃいけ  
ないんだ。」

「それでも、俺は助かった。ホントありがとな」

「その話はもういいです。んじゃ、俺たちはもう行きます。またど  
こかで逢えたらいいですね」

「おう、またどこかでな」



買い物も終わりギルドのほうに向かう途中後ろに怒気が・・・  
誰だかはわかってるが、振り向きたくないな〜と思っていると、  
やはりメイが文句を言ってくる

「さっきのまるで私が猪突猛進みたいじゃない!!」

「否定できないだろ？いつも一人先走っていくし、危ないからって  
言っても問題ごと突っ込んでいくしな」

「私って、そんなに迷惑掛けてる？」

悲しげな声の響きが俺の心をグサリと抉るが、ここはちゃんと  
言っておかねばと心を鬼にして言う。

「迷惑ってほどじゃないが、よく考えて行動しろって。困っている  
人を助けるのはメイの美德だが、話を最後まで聞かずに飛び出して  
いくのは悪い癖だぞ」

うん。分ってはいるんだけど。と言っているが今のところ直る兆し  
は見えていない。行動力があるということは素直に羨ましいが、い  
つも巻き込まれ解決する俺のみにもなってくれ。おっと、ギルドに  
着いた。古い木製の扉を開け中に入りテーブルの脇を通り奥にある  
掲示板を見に行く。先程の盗賊の討伐依頼出てないかな、

う〜〜ん・・・

出てないみたいだ。しょうがないとりあえずカウンタに行こう。

カウンタに並び2名ほど前に並んでいたが直ぐに順番がきた。ここ  
一ヶ月このギルドで稼いでいたため、すっかり顔なじみになったおじ  
さんが声を掛けてくる。

「お？ユウ珍しいな二日連続で来るなんて、なにかあったのか？」  
いま俺達は、一度依頼を達成した後1〜2日は休みを取る様にして  
いる。毎日依頼をこなしても問題ないが、他の冒険者の仕事を取り

上げかねないために自重しているのだ。前にそれで問題になったし。「ええ、もうそろそろ春になるんで。次の街にでも行くとかと、その挨拶に……」

そうか、残念だとカウンタのおじさんは笑って手を差し出し握手して、これからも頑張れよと声を掛けてくれた。ここみたいに小さい村だと酒場や宿屋と一緒にいるところが多い。メイとも握手を交わしたのち、ギルドを後にする。宿に戻ると、窓を拭いている宿のご主人がこちらに気づいた。

「おかえりなさい。早いですね、あつ昨日はお肉ありがとうございました。」

「いえいえ、急なんですけど俺たち明日旅にでるんです。そのために、準備しないとイケないですからね」

「そうですか、もう春ですからね。見送る者にとってはさびしい季節です。でもまあ、新しい出会いもありますしそれも楽しみですが。」

そうですね。と言って部屋の中に戻り明日の出発に備える。夕食を食べ終えすっかり暗くなった空を窓べから見上げる、澄んだ空気の雲ひとつ無い中に月がポツンと浮かんでおり、なんだか寂しそうに見えた。それを見ながら、今までのの出来事を思い出す。

出会いと別れ。

判っていても別れは悲しく寂しいものだ。それが、今生の別れとなれば尚更だった。まあ、死別した訳ではないが二度と会えない事は確かだしな。この世界で生きるしかない俺にはどうしようもない物

だ。でも・・・思い出す位・・・いいよな・・・

空の上、月の柔らかな光がこの世界を包み込んでいる気がした。

いつかの日に・・・(後書き)

前に投稿したものを書き直したので、投稿します。余り変わって無いかも知れません。

## 俺が飛ばされるまで

俺の名前は、加賀美<sup>かがみ</sup> 結城<sup>ゆじき</sup>（21）ごく普通の一般人だった。

だったと言うのも、まさかの異世界へ飛ばされてしまったからなのだが。

ちなみに、俺の容姿は中の中ぐらい（少したれ目が気になる、身長は175センチとやたらと平均的だ。

趣味は機械いじり（車やパソコン）と小説を読む事（かなりの雑食で最近のブームは異世界トリップ物。やっぱ冒険は男のロマンだよね

その日、いつものどろりに仕事を終えた俺は、仕事場のすぐ近くのスーパーへ買い物に来ていた。

明日が非番日の為いつもより多めの食料と酒（そんなに飲めない為少量だが・・・）を買い込み、車に乗り込む。

この車は高校卒業と同時に就職した俺に、祖母ちゃんが買ってくれたシルバーの軽自動車で、

中古で車検付き20万と言う激安車（まさかの高年式）という年数が経っていないにも係わらずそこら中、故障だらけの愛車だ。

ヒーター点ければ10回に1回はエンストするし、坂道では凄まじく回転を上げないと（5000rpm位）登らない。

でも、せっかく年金暮らしの祖母ちゃんに買ってもらったのだからと騙し騙し乗っていたんだ。

そんなオンボロ車で家へと向かう途中、交差点の先頭で赤信号になり止まって待つ。信号が青になったため走り出そうとアクセルを踏み込んだ瞬間にエンスト。

一瞬焦るがいつもの事なので、瞬時にクラッチを踏み込みアクセルを煽りつつ、セルを回す。キウルキウルとセルが廻りブォンッとエンジンが掛かりクラッチを放すとやっとな走り出した。

後ろを待たせては居なかったかとバックミラーを確認してみたが、さすが田舎（ドが付くほど）1台も並んでなんか居なかった。すぐに前方へと視線を戻そうとした時、そこで異変に気づいた。

信号無視で横から迫るトラックを。

とっさにハンドルを左に切るが間に合いそうに無い事は誰の目にも明らかだったろう。

大きな質量同士がぶつかる大音響が鼓膜に響き、右からの衝撃にエアバックが開く。胸と顔を強打し振り返りでバックレストに後頭部を打つ、意識の糸はそこで途切れた。

その現場を見た主婦は、軽自動車の運転手は死んだと直感で判つたらしい。軽自動車はトラックにぶつけられ電柱との間にはさまれて運転席どころかほぼすべてに渡って潰れ原型を留めなかった。その軽自動車は幅が1m50cmほどあったのが、90cmほどになったのだからよほどの衝突のエネルギーが凄まじいことを物語っていた。

何も無い空間、いや・光しかない空間と言ったほうが近いだろう。光と言っても強い光ではなく、淡く儂い灯り。何処からとも無く照らされた光は光源が確認できない不思議な光だった。

「面倒なことになったのう・・・」  
白い布をまっとうした老人が呟く

「ごめんなさい。お父様」  
闇を纏った少女は顔を俯けて泣きそうな声で謝罪の言葉を紡ぐ

「なってしまったものはしょうがないじゃろう。それより、これからの事じゃ」  
まさしくその通りだった。老人と少女の前には一人の少年が淡い光に包まれて1メートル程の空中に横たわっていた。事故に合った筈の彼は何の欠損も無くきれいなままだった。

「下界に戻すことは出来ないのですか？」  
少女が尋ねる。そんなことは出来ないのは重々承知していたが、それでも一縷の望みを掛けて。

「判っておろう、此処に連れて来た時点で魂の変容が始まっておる。このまま進まば人ではない何かになってしまいうじやろう。このまま返せば、今の文明が崩壊しかねん」

老人は厳しい顔でそう言いきった。少女は其れでも、と食い下がる。「マールヤ文明はそれで崩壊したのじゃ、忘れたか」

「.....」

沈黙がその場を支配し重い雰囲気沈殿する。

暫らくして不意に老人が口を開いた。

「方法はある。転生させるか、あるいは.....」  
だが、転生させるにもこのままでは無理なことはわかっている。転生させるとしたら、我々の介在の名残を消す為に悠久の時が必要だ  
らう。

それでは、この青年があまりにも可哀想であるし、事の発端はこちらにあるのだ。だからこそ、対応に困るのじゃが

「他に何か方法が？」

「ヤーベエの世界へ飛んで貰う。奴のところならば、今までに頼まれて何人も送っておるからの。こんなケースは始めてじゃが」  
それならば何とかなるじやろうと、少女の方へ微笑みを見せる。

少女が安堵するように胸を撫で下ろしたのを見届けると、老人は少し上を向いてそこに居ない誰かへと語りかけはじめた。



いくつ時が経ったのだろうか、老人はここに居ぬ誰かにすまぬと話し会話を閉じた。

彼は、少女の方へ向き直ると話はずいたと満足げに微笑んだ。

さてと、さつそく行って貰おうと老人は右手を挙げると、10メートルは在ろうかという巨大な白く聳える門を目の前に出現させる。その、荘厳な門は細やかな装飾が施されており、見る者を圧倒する雰囲気醸し出す。

ギギギツと門が開き始め、扉が完全に開くとその先は眩い光で満ち溢れていた。そこへ青年は吸い込まれる様に消えていった。そして青年が消えると、門は閉まり跡形も無く消えさった。その場がまた、静寂に包まれる。

「結城よ、そなたの新しき人生に幸多からん事を……………」  
その場に残った老人が何かの所作か左手を胸に手を当てて、右手の指先でなにかを描き呟く。

「結城さんごめんなさい……………」  
闇を纏った少女は、すまなそうに呟いた。

俺が飛ばされるまで（後書き）

2話目も焼き直したものです。そんなに変わってないのです。しかも短くなってしまった、だが、後悔はしてない（キリ  
ここから先は書下ろしです。明日には投稿できるかも？

誤字、脱字、報告ありましたら、よろしくおねがいします。でわで  
わ

## 異世界降臨と初戦闘は？

さらさらとやさしい風が前髪を撫でる。木陰からもれる木漏れ日の光が、瞼のうちにある瞳に届き意識を刺激する。彼は、まどろみから目覚め瞼を開く。

「うっむうっ」

起き抜けの頭はいつこうに働かず、目の前の光景をただぼんやりと映すだけだった。初夏のような、暑いとは言えないからりとした空気が、とりあえずと、体を起こし周りを見渡す。そこには見渡す限りの鮮やかな緑と大地の息吹を感じさせる茶色、そこらじゅうに聳える巨木とそこに差し込む光の筋は幻想的で思わず見とれてしまった。

《私の声が聞こえてますか？》

爽やかな優しい鈴の音のような声が耳に響く。

突然の声に急いで立ち上がり、キョロキョロと辺りを探してみる。周りに人は1人も居ない、それどころかこんな自然の中だということに小鳥のさえずりさえなかつた。すこし不気味に思いつつ身構えていると、また声が聞こえた。

《落ち着いてください。私は其処に居ません》

(ここに居ない？どう言う事だ？) 疑問に思いつつ声を上げた。まづは意思疎通しないと進まなそうだ。

「あなたは誰だ？そしてここはどこなんだ？」

するとすぐに返事が返ってきた。

《私はこの世界の上位神で、ミッテと言います。此処は何処かと聞かれると、何と言って良いんでしょうか》

「神様？ほんとに居たのか・・・でも、ここが分からないってどう  
いうことだ？日本じゃないのか？」

神様なんてもつと上から物言いしてくるもんだと思ってたが、どう  
も違ったようだ。こちらが落ち着くようにゆっくりと語りかけてく  
る。

《いえ、此処は貴方の居た世界ではありません。此処はアルベリア  
ンと呼ばれています》

「アルベリアン？聞いたこと無いな。って事は、ここはいわゆる異  
世界なのか？」

《はい、その通りです。今居るこの森はモント共和国内のニズク山  
と呼ばれてますね》

衝撃の事実をさらりと告げるミツテと名乗る声。

「山？確かに僅かだが上に向かって傾斜している様にも見えるが」

《何か聞きたい事は有りませんか？あまり時間が有りません》

「なぜ？」

急に時間が無いといわれても困るんだが。ここには、俺とミツテし  
か居ない。頼れるのはミツテしかないのだ。って言っても厳密に  
はミツテがこの場には居ないが。

《今の私が世界に干渉するには私と波長の合う、物者に協力してもら  
わなくてはなりません。ですが、波長の合う者は少なくその者にも  
負担になります。特別な装置神殿があれば声を届けるくらいできるので  
すが》

と言うことは、俺が波長が合うつて事か。今の所、負担を感じては居ないが時間が無いなら急いで聞かなくちゃならない事を纏めなくてとはと、考え始める。

今更だが、なぜ俺がここに居るのか聞か無くてはならないだろう。あとは、この世界がどう言った所なのかと言った所だろう。そう考え、声を出そうとしたところで向こうからの声が先に出た。

《先に何故貴方が此処に居るのか答えなければ為りませんでしたね。それは、貴方の居た世界の神が貴方を此方に送って遣したからです。今までも、貴方の居た世界から人を送って貰う事は有ったのですが、向こうから送られてきたのは初めてです。此れまでは、此方から頼んで送ってもらっていたんです。あと、此方は貴方の知識にあった中世と同じと考えて貰って構いません。ただ、そちらには無い魔法があります》

今さらつと魔法の言葉が出たな。ってか俺の知識つて事は俺の思考が読めるのか。道理で、耳で聞いているというより頭に直接響くような気がするのか。まあ、そんな事より今まで色々有り過ぎて忘れていたが、帰れるかどうか聞かなくてはと思った矢先、次の瞬間その考えが打ち砕かれることと為った。

《残念ですが、貴方は元の世界に返ることは出来ません。此処は貴方が居た世界より下位の世界なのです。水が低きに流れる様に、上位世界には行く事登るが出来ません。ですので、貴方には此方で生きて頂きます》

それを聞いた俺は、ガックリと頂垂れ絶望を味わった。だがそこである事を思い出す。異世界トリップしかも上位世界から来たつて事はテンプレで言う所のチートな能力があったりするのか？そう考えると、なんだかやる気が出てきた気がする。

《確かに、貴方が此方に来たことで力を得ているでしょう。ですが、私から貴方に与えられる能力は殆どと言って良いほどありません。なぜなら、貴方の中に私にも判らない力が宿っていて、その力が殆どの領分を占めています》  
わからない力ってなんだ。っと心の中で突っ込みを入れつつ、これから必要になるであろう言葉や文字に対する物は教えてもらえるのか心で聞いてみた。何て言っても、意思疎通は重要だしと、前会社に居た中国から来た伴君も最初は大変だったとしみじみ思う。

《その程度なら大丈夫です。今のままでも、話すのは問題無いでしょう。文字の方も判る様にしておきますね》

そう言った直後に頭に急激な負担が掛かり、まるで知恵熱の様な症状が出た。っと言っても、ほんの1〜2分で収まり溜め息が出た。なぜか今は頭がすつきりしている。ミツテが言語のほかになにかしてくれたのだろうか。

《もうそろそろ時間のようです。あと、ポケットに入っているものは冒険者ギルドのカードです。身分証の代わりになっているので失くさない様に気を付けて下さい。この山を越えた先に1番近い村がありますのでまずは其処を目指してみても如何でしょうか？。では何かあれば神殿でお会いしましょう。あっそうでした、魔物も出ますのでそちらも御気を付けて……》  
そう言い、ミツテの声が聞こえなくなった。しばらくすると徐々に周りの音が聞こえ出し、木のさざめきや鳥達の鳴き声が戻り始める。最後に気になることを言っていたような気がするが、ギルドカードの方が気になり、先程まで気がつかなかった、ポケットのふくらみに手を入れてカードを取り出す。金属の様な光沢の白いカードで、大きさは免許証をふた周りほど大きくした物だ。  
そこには、こう書かれていた。

表には、

名前 加賀美<sup>かがみ</sup> 結城<sup>ゆうき</sup>

種族 人間

年齢 21

出身

性別 男

ランク F

裏には、

ちから A -

すばやさ B

ぼうぎょ C +

まりよく F

しゅうちゆう C +

??? EX

称号 【異世界神の情け】 【異邦人】

と書かれていた。

ひと通り見て思うことは、ちからA - って馬鹿みたいに高いし、??? ってなによって事だが、ミッテがないから聞けないし、これは人に合ってから聞くしかないかな。

「取り合えず、山頂を目指すか」

そう呟き、気合を入れる。俺は山頂を目指し登り始めた。目の前に広がる大自然を見ながら歩み始める、巨木の間には光が届きにくいのか、木と木の間は結構な間隔があるにも拘らず膝ほどの植物しかない。歩きやすくて結構なのだが。

小1時間ほど登った所で、ある事に気づく。上にあがるにつれて、少しずつ勾配がきつくなっているが、少しも息は切れないし疲れないのだ。少し走ってみようかと、小走りで駆け出し徐々に速度を上

げていく。坂を登っているというのに、元の世界記録保持者もびつくりの速度が出た。体感では80Km位は出ているんじゃないかと思うぐらいだ。

あつという間に山頂付近に着いた。そこは、殆ど木が生えておらずサッカーコート程の開けた場所になっていた。ここまで、魔物に合わなかった訳ではない。つと言うより目の端にチラツと映っていたのだが、かなりの速度が出ていた為に魔物が追いつけずに居ただけの事だ。だが、目の前に居るのには逃げられそうに無い。こんなこと言っていてなんだが、現在絶賛現実逃避中である。

そこには、鋭い牙に長い首、肩から先がこもり翼のようになっていて、筋肉が盛り上がった太い足と巨大な鉤爪、そして長い尻尾とまるで、ワイバーンつかむしろワイバーンな姿がこちらに大きな翼（端から端まで6mはありそうだ）を広げ威嚇している。これはまずい。つか、不味すぎる。こっちに來て1日も経たずに死ぬのは勘弁して欲しい。

こちらが動かずどうしようか迷っていると、こちらが動かないことに業を切らしたのか、ワイバーンは鎌首を仰け反らせ勢いを付けて大きな牙を覗かせ首をこちらへと伸ばしこちらに首が届く直前に頭を半回転させ大口を開ける。その勢いに驚き、足に力を込め後ろにむかって飛ぶ。

「がつつ痛うつつ」

余りにも飛びすぎて広場？の端にある巨木に背中を強かに打ちつけた。その割りに痛くは無かった物の、癖で痛いと言ってしまった。少し恥ずかしい。体勢を立て直しそこから、ワイバーンを窺うとその場から動かずグルルルとこちらに威嚇するだけだ。

これはチャンスかもしれない、近寄らなければ大丈夫のようだ。と、



広場の端をワイバーンに威嚇されつつじりじりと進む。その間もワイバーンを窺っていると、大きな翼をはためかせ始めた。これは飛ぶ予兆かと身構えると翼に淡いエメラルドのような靄が集まり始め、ワイバーンはこちらに向かって翼を振り上げた。

振り上げた翼の先からエメラルド色のブーメランらしき物が無数に飛んでくる。かなり早いがそこそこの距離があつた為、横に飛んで避けると今まで居た場所が鋭い斬撃が打ち込まれたかのように巨木は斜めに切れ地面は抉られていた。チクリと左腕が痛み、半袖を捲ると僅かだが血が滲んでいた。

「ふふっ洒落にならん」

おもわず笑ってしまった、避けなかつたら上半身と下半身がサヨナラするところだった。これで逃げるわけにはいかなかったな。近づけば牙や爪が離れたらかまいたちと来たか、こりゃ詰んだな。

もう逃げるのは諦めよう。なんとかして、倒すしかなさそうだ。

その間も、ワイバーンは翼を振り上げかまいたちを放ってくる。それを右へ左へと飛んでかわしながら策を練る。

「避けてるだけでは埒があかないな、だが近づくのも危険だし」  
近づけば間違いなくかみ殺す為とその長い首を伸ばすだろう。何か無いかと周りを見渡すとそこにはかまいたちの当たった岩が砕け破片になった石が転がっており、ひとつ手にとってみた。ソフトボールほどの大きさの石は驚くほど重さを感じさせない。それをワイバーンに向かって力を込めて投げてみた。

ブオンと風を切りながら石は胴体に当たると、すこし表面を削りかすかに赤い血が滲む。当たった衝撃に耐えられなかったのか石は粉

々に砕けてしまったが。それでも、むこうは攻撃を受けることが驚きだったらしく翼を止まってしまう、かまいたちが止まる。

これはいけるとまた石を拾い投げつける。数回、数十回と繰り返すと、そこ此処から血が流れ始めワイバーンはとある行動を取り始めた。

膝を落とし何かを守るように身を丸め始めたのだ。なにか大切なものが腹の下辺りにあるらしい。ここぞとばかりに動かなくなったワイバーンに石を思いつきり投げつけた。なんだか可哀想な気もするが、ここで殺せないようならこの先、生きて行けないだろう。

俺はまだ生きていたいし、その為にはこれ<sup>殺し</sup>が必要なら、やるしかないのだ。手近に石がなくなると、その辺にある小さい岩を（と言っても両手でなんとか抱えられるくらい）持ち上げてみた。重くは無<sup>い</sup>ものの、大きくて持ちづらくよろけてしまった。

石による攻撃が止んだ事に気づいたワイバーンが、首を持ち上げようとした所で体勢を整えた俺の渾身の投擲がきまる。勢い良く手から離れた岩は放物線など描かず、ただ真っ直ぐにワイバーンの胴体に半分ほど刺さりそれでも勢いが無くならなかったのか仰向けにドスンと倒れ、地面が僅かに揺れた。

もがく様に巨大な足をバタつかせ、最後の咆哮か血を吐きながら耳を劈くような叫び声を轟かせた。次第に動く足にも力が無くなって最後にはびくびくと痙攣するだけとなった。

この時、初めての戦闘は俺の勝利で幕を閉じた。



## 異世界降臨と初戦闘は？（後書き）

なんとか書き上げました。まだまだ、構想が固まりきっていません。ボンクラ具合に拍車が掛かってますね。すこし更新に間が空きそうです。毎日新しい設定が生まれるのは考えていて楽しいのですが、いかんせん纏まりに欠けるこの頭を如何にかしたい今日この頃。  
誤字、脱字、報告お待ちしております。

## 戦闘以後

「はあはあ、死んだか？」

倒れたワイバーンを見つめ、警戒しながら少しづつ近づく。歩く足がなんだかぎこちない。緊張が少し解けたのか、膝が笑っている。プルプルと生まれたての小鹿のような感じの膝に両手でバシッと喝をいれるが今にも倒れそうだった。

仰向けに倒れ腹の辺りに岩が刺さっている姿はまるで小山のようだ。その刺さった岩の辺りから今もだくと血が溢れ出しており鉄の匂いが辺りを支配する。

ちなみに、俺は爬虫類は飼おうとは思わないものの嫌いではない。

痙攣さえしなくなった、その巨体の目の前まで来て恐るおそる血を避ける様に触れてみる。まだ温かい、そりゃあ今まで生きてたんだものと自分に突っ込みを入れつつあちこち触って歩きまわる。

温かく分厚い皮を触っているとなんだか、いまにも起き上がって来そうな妄想に襲われた。

冒険者ギルドがあるとと言う事は、このワイバーンも討伐？対象になっっているかも知れない。なら、討伐証明を持っていけばお金をもらえるだろう。その為には、ワイバーンを証明するものを持って行くしかない。それがどこだか知らないが、普通牙か、爪、あと尻尾くらいか。こいつなら翼って線もあるかも。

ちょうど腹の方に居たため、足に近づき野太い爪を掴むと取れないかと引く張る。すると、メリメリと嫌な感触が手に伝わり遂にはも

げた。もげた拍子にバランスを崩し尻餅を着いた。

少し悪態を吐き立ち上がると、もう一方の爪ももぎ取って頭の方へと行き牙も剥ぎ取る。それを、ズボンのポケットに入れた。かなりはみ出したが、ポケットの蓋？を閉めると落ちそうになかった為、よしとする。

一頻り取り終えると、先程までワイバーンが護っていた所にたどり着いた。そこには、木を噛み砕いたような大鋸屑のような物が敷き詰められており、その中央にはダチヨウの卵を大きくした卵が2つほど収まっていた。

「こんな大きさの卵なんて見たの初めてだ。」

ダチヨウの卵なら、昔小学校の実験室に飾られていたのを見た事はあるがそれよりもふたまわりほどでかい。白い殻に黄緑色の模様が浮き出ているがこれがまさしくワイバーンの卵で間違いないだろう。確証は無いが。

さて、どうしようか。

選択肢としては3つ、1つ目このまま放置、そのうち他の魔物に食べられるか生まれたとしても生き残れないだろう。2つ目生まれる前に潰し殺す、万が一生き残ったとすると人が襲われるかもしれない。最後は持つて帰る、これが大本命。RPGとかだとワイバーンとかで空を移動するしな。

ただ、俺に育てる事は無理そうだ。今まで犬とか猫などの動物すら飼った事すらないし、第一何を食べるのかすら想像つかん。

たぶん、モンスターテイマー調教士辺りがいるだろうからそこに売ればいいと思う。い  
なかつたら売れるかどうか判らないがギルドとかで引き取ってくれ  
ないかな。最悪駄目なら、潰すしかないが。

まあ、取り合えず持って行こうと持ち上げるが、両手に卵。あんま  
り力を入れると割れそうだ。今すぐく卵用のパックが欲しくなった、  
こんなにあれが卵パックあんなに素晴らしい物だとは思わなかった。でもまあ  
入らないだろうが。そんな事を考え苦笑する。

この光景を人が見たら、危ない人認定されてしまう。だって考えて  
も見る、ワイバーンが倒れている前で両手に卵を持って笑っている  
姿。だめだ、黄色い救急車を呼ばれても文句言えない。

何かで運べないかと探すは何も見当たらなかった。しょうがないと、  
上着を脱ぎ裾を縛り卵を並べて包んでみた。半袖の為、縛るとおぶ  
るような物には出来なかった。片手で持てるようになっただけまし  
かと考え、それより大事なことを思い出した。

俺がここに居るのは何の為だ？そんな事は決まってる。この先にあ  
ると言う村に向かうことだ。でも、その方向がどの方向か戦ってい  
るうちに判らなくなっていたのだ。

周りを見渡すが、自分の居る所こそ開けている物の広場の終わりに  
は20メートルを越えるかというほどの巨木が生えており、余り見  
通しは良くないというより視界が制限されていると言った方が正し  
いだろう。

どうにかして、村のある方向を確認せねば、まともにとどり着ける  
かわからない。

「そつだ。上から見れば一発じゃね？」  
ちよつとバックステップしたくらいで有り得ないほど飛んだのだ、  
垂直飛びでも相当飛べるはず、つとさつそく実験。結果は、まあ成  
功と言えるんだらうが失敗したとも言えた。

足に力を込め、屈伸状態から一気に膝を伸ばす。重力を振り切るよ  
うにもものすごい速度で空へと飛び出した。巨木を少し越えた辺りま  
で飛ぶとすぐに上昇が終わり自由落下が始まる。ものの数秒で地面  
に着地した。

ほんの数秒では、見れる範囲は少なく、何度も飛ばなくてはならな  
い事に気づきたため息を吐きつつ卵は手に持ったままだと割れるかと  
思い、10歩ほど離れた所に置いておき、そして何度も飛び上がる。

数十回、繰り返しただらうか、落ちる時の胃が持ち上がるような感  
覚に気持ちが悪くなりつつ、なんとか村の方向がわかった。太陽の  
向きを考えるとこの山から南西の方向にあつて、ここからだとな  
り小さくつつすらとだが人工物である家らしきものが見えた。

「つつぶ、これで、なんとか、なりそつだな。少し遠いが、なんと  
か、なるだらう」

目的地が見え、安堵とこれで人と逢えるかもとテンションが上がっ  
てくる。

良しと、気合を入れ卵を包んだ服の所まで歩き右手で持ち上げる。  
そのまま南西の方へ広場を歩きだすと、端の巨木の下から5分の1  
ほどの所に鈍く光る物が見えた。

それは、深々と巨木に突き刺さつた剣で柄の部分の他は殆ど見え  
ず柄頭が鈍く銀色に輝いていた。取らうと思ひ、巨木に向かつてジャ



ンプし柄を左手で掴んで木に向かって軽く蹴りを入れる。木が軋む音が聞こえ、ズルツと剣が抜けた。着地して剣を見ると小ぶりの片手剣だった。

刃の長さは肩から先と同じくらいで、鈍い銀色に光り所々刃が欠けている。その刀身は細く軽い。自分の力が異常だから、はつきりと判らないが、体感的にはペンと変わらないくらいに思える。

卵と剣を持ち替え右手で持つと、軽く振ってみる。上から下へヒュンと空気を切り裂いた。なんか凄そうだと木に向かって試し切りしてみる。

袈裟斬りしてみると刃の半分位まで簡単に入り、途中で止まる。斜めに入った線が途中で僅かに太くなっていて刃が垂直に入らなかったことが原因だと思われる。

片手剣  
こんな物なんて初めて握ったから当たり前だとひとりごちる。

剣を使うなら誰かに教わら無ければならないかもな。気を取り直し抜き身の剣をベルトに差し、山を降りることにした。

**戦闘以後（後書き）**

かなり短いです。

## 俺じゃない誰か

剣を腰のベルトに差し、山を降り始める。

巨木の葉の間から光が差し込み意外と明るい。道なき道を降りているため、その速度は遅い。

辺りはとても静かで葉を揺らす風の音と地面を踏む音がかすかにするだけだ。そのまま30分ほど降りて異変に気づく。

「まったく魔物がでないな」

そう、登りでは凄い速さで上がった為に魔物がついて来れず遭わずに来れたが下りではそうは行かない。後ろに重心が移っており速度を出すと転びそうになる為に歩く程度の速度でしか動けない。この状態ならいくらでも魔物に襲撃を掛けられるだろう。

そう予想していたんだが、今の所は襲撃どころかまったく心配すらない。と言っても、心配なんて早々判る物でもないだろうが。

「まっ、襲撃が無いのはいい事だしな。まずはここを抜けないと何も始まらないし」

そう思い直してずんずんと歩き出す。もうお昼をとっくに過ぎて太陽も真上を通り越した。

もうお腹が空いてしょうがないものの、持ち物に食い物も無ければ食べられる草とかの知識も無い俺にとって、見たことが無いものだらけのこの世界は何が食えるのかすらわからない。

右手でおなかを押さえつつひもじいなと呟いた。何でもいいから飯

よカモン。

だめだ。思考が纏まらない。まだ、起きてから半日も経ってないのに何でこんなに腹が減るのだろう？村に着くで持てばいいがため息が出た。

オルデンサイド

木々の間から人の大声と獣の叫び声が響く。木々の間は広く所々伐採された切り株が地面から顔を覗かせている。陽をたっぷりと浴びた草花はのびのびと育っていた。

ここはニズク山の入り口から30分程登った所で、比較的弱い魔物や傷薬となる薬草が群生しており初心者や小遣い稼ぎの冒険者が来る絶好の狩場だったんだが、なぜか中腹以上に生息する魔物に襲われたんだ。

「おい、ジェミド。右から来てるぞ！気を付ける」

そう言ってジェミドに注意を促すと応つと返事が返り、俺も身体強化の魔術を待機状態から発動状態へ移行し目の前に居たグランドウルフを一撃で首を飛ばす。

その間も、辺りに目配せをし警戒を怠らない。そして、身体強化を待機へと戻す。これは、体に負担が掛かる上燃費が悪く常時魔力を食われ続けるからな。

「何でこんなにいんだよ」

とジェミドは右から来ていたウルフ2体を相手取り愚痴をこぼす。そうこうしている間にも魔物は増え続けている。まずいと思うが逃げ場が無い。このまま逃げるには、手が足りないだろう。ここには俺とジェミドしか居ない、魔物を除けばだが。

そんな考えを切捨て目の前に迫る魔物にスナップを利かせた剣でけ

ん制する。

ウルフはバックステップでかわすとグルルと威嚇してきた。他のウルフより少し大きく毛並みも良く見える。

たぶんこいつが親玉だな。こいつを殺れば、統制が乱れて少しは楽になるはず。いや、なってくれ。

親玉のウルフは中々すばしっこくコチラの攻撃が当たらず、親玉に気を取らされすぎていると仲間のウルフが死角から攻撃してきたりする。

連携は中々なんだが、いかんせん唸っているだけに位置が丸分かりだ、さすが魔獣とは言え獣。不意を付こうとして、横から来たウルフに左手の鋼の籠手で殴りつけ体制を崩したところをすかさず一閃。前足が1本斬り飛んだ、悲鳴のような泣き声を上げているとあつちを片付けたジエミドが止めを刺した。

また1匹減ったな、後何匹だ？ひい、ふう、みいの、まだ、6匹以上いやがる。まだ、俺の魔力はあるが、もうそろそろジエミドの魔力は底を付くはずだ。あいつは制御が下手で効率悪いからな。

身体強化が無くても、ジエミドならこいつ等に負けはしないだろうが物量に物を言わして特攻掛けられたら怪我じゃ済まなくなりそうだ。

「オルデン！！悪い、魔力が無くなりそうだ。どうするまだまだいるぞ」

そう言いつつ、身体強化を解いたのか体の切れが無くなるジエミド。まあ、そこらの冒険者に比べたらそれでも強いだろうが。

分かってると返して、また身体強化を使いウルフを切り裂く。こりや明日は筋肉痛確定だな。明日まで生きればの話だが。さっさと殲滅しないとこちらがどんどん不利になるな。

そう思っていると、後ろの方から何か近づいて来るのが気配で分かった。嫌な予感がして、身体強化を使い目の前のウルフに前蹴りを入れそのまま前に向かって5メートル程飛ぶ。

着地し振り返ると巨大な黒い毛並みのブラックベアーがグラウンドウルフを吹き飛ばしていた。飛ばされたウルフが内臓を撒き散らせながら飛んで行き木にぶつかって落ちた。

「どうすんだ。ありやあブラックベアーじゃねえか」

こちらに近づきつつあるベアーに警戒するジェミド。ブラックベアーは山のかなり上の方にしか居ない筈。何故こんな所に高難易度の魔物がでたのかさっぱり分からない。

ベアーに仲間を殺されたのに怒ったのかウルフたちが一斉に襲いかかるが、それはなんと言うか瞬殺だった。

そのでかい凶体の割りに素早く、巨大な爪で切り裂き、両前足で踏み潰しその強靭な顎で噛み千切った。その姿は圧倒的な強者そのモノで勝ち目が無いのは明らかだった。

あっという間に、ウルフ達は壊滅しそこにはウルフの血で赤く染まったベアーと俺達2人のみとなった。

「逃げ切れると思うか？」

「無理だな、あんだけ動けるなら全力で逃げても追いつかれそうだが、何が何でも逃げられる状況を作らないとな」

そう言っただけだと少し希望が出たのか蒼白だった顔に生氣が戻る。ここから巻き返すのはしんどそうだがやるしかない。

まずは、小手調べと予備の武器であるナイフを投げつけた。黒く分厚い毛皮はまったく刃を通さずぶつかって落ちただけだった。

まあ、ある意味予想通りだ。これは、剣が通るかも怪しいな。だが、やらなければこちらが死ぬ。

「ジエミド!!お前は後ろに廻れ俺が引き付ける!!でかい一撃に注意しろよ。」

「大丈夫なのか？」

「お前が魔力使いすぎなのが悪いんだよ。あれ使わないと避けられないだろ」

そう言っただけで、身体強化を最大にする。一気にベアーに向かって詰め寄ると一太刀浴びせ、反撃の来る前に敵の射程内から退避する。高負荷の掛かった身体の節々がビキビキと音を立て始め、そう持たないことを予感させる。

もう一度と、一気に詰め寄り今度はなぎ払いを試みるが効果は薄い。一応傷はついている様だが浅く軽傷で済んだ。ジエミドがその間に後ろに廻っていて間合いを詰めている。

これはチャンスとこっちで斬り付けながら、向こうには思いつき刺せと叫ぶ。



だが、刺して見たものの10センチも刺さらぬうちに動かなくなつてしまったようでジエミドはベアーが振り向く前に剣から手を放し距離を取り腰から大振りのナイフを抜き構えなおした。

いよいよもつてまずい状態になつて来たな、打つ手無しとはこの事だろう。

どどん魔力も無くなって来てるし、体のほうも限界に近い。一撃離脱は出来なくなつてきたので真正面から来る攻撃をなんとか避けつつ、反撃する。

それでもむこうにしてみたらたいしたダメージは受けてないのだから勝てる気がしない。

そのまま無理くり避けていると身体の方が持たなかつた様だ。膝の力が抜けカクンと右膝を折ってしまった。ベアーはその機会を見逃さず、腕を振り上げ大振りの攻撃を仕掛けてくる。

当たれば良くて重傷、悪けりゃ即死の攻撃が迫り思わず目を瞑る。一瞬あとに、ドガツつという音が聞こえた。

何時まで待つても来ない衝撃におそろおそろる瞼を開けると、目の前にベアーが居なかつた。そこで左右を見渡すと左に吹き飛ばされたベアーが起き上がる所だつた。

ベアーの右肩は袂れ腕が辛うじて繋がつていていると言つた所で、左腕だけでなんとか起き上がった。

だが、次の瞬間灰色の何かが目に映つたかと思うとドカツとまた音が響き、ベアーの胸辺りに人の頭ぐらいの大穴が開いていた。そし

て口から血を吐き出したかと思うと、そのまま倒れてしまった。

何が起きたかさっぱり分からない。それはジエミドも同じなようでポカンとしたまま大口を開けている。

右側の方からガサガサと草を掻き分ける音がして、細身の男性が姿を現した。

「大丈夫でした？」

それが奴、非常識の塊との最初の出会いだった。

俺じゃない誰か（後書き）

遅くなりました。考えが纏まらず、文量が安定しませんね。どっにかしたいものです。

## 第1冒険者発見!! (前書き)

前の話の少し前から始まります。

## 第1冒険者発見！！

俺は順調に山を下っていた。少しずつ周りの景色が変わり始め、木の間隔が広くなって来たと思う。

所々、伐採されたたろう切り株が見えた。と言う事は、ここまで人が入って来ているという事だろう。そうなれば俄然やる気が出るという物だ。

それからまた少し斜面の傾斜が緩やかになる。歩く速度が一步一歩進む程度からゆっくり歩くほどになった頃、前方の方がなにやら騒がしいのに気づいた。

かすかに犬が咆える様な声と人の声が聞こえる。やっとと内心小躍りしながら駆け足位の速度で声のする方に向かった。

あと、50メートル位に迫った時やっと人影を確認するがどうやら魔物との交戦中のようだ。今行ったら危なそうなのでここで見てみよう。

臆病者と呼びたいなら呼ぶがいいさ。今出てつても向こうの足手纏いにしかならない自信があるぞ俺は。

襲っているのは犬を大きくした様な魔物で、もしかしたら狼なのかもしれない。鋭い牙がちらちら見えそんなのが、5、6匹ほど見えた。

戦っていたのは2人組みで、もしかしなくても冒険者だろう。ずいぶん余裕がある様に見える。あ、また1匹斬った。凄い剣速で一気

に横に振るうと、狼の前足が1本飛ぶ。そしてすぐさまもうひとりが止めを刺している。

かなりのコンビネーションだ。そのまま魔物を圧倒している様に見える。えたんだが、なにやら少し小さい方の動きが悪くなった。それでも、少しも狼に触れさせず屠っている。

見ているとまた魔物が現れた様だ。それは、黒いヒグマの様にも見える。魔物で目の前に居た狼を前足で吹き飛ばした。腹の辺りが抉れ内臓が飛び出してちよつと直視しがたいグロイ光景が広がっている。

なにやら狼がお怒りの様子でヒグマもどきに向かって咆えると一斉に飛び掛った。だが体格が圧倒的に違う上に、あれだけでかいのにやたら素早い。

1分も掛からずに狼は肉塊に変わってしまった。しかも、今度は2人組みに目標を定めた様だ。

それに反応し、背の高い方がナイフらしき物を投げるがヒグマは意に介さず居たため行けるかと思っただが刺さらず弾かれただけだった。ヒグマはよほど自分の身体に自信がある様でそのままじりじりと距離を縮めだした。

そうしていると、背の高い方が凄まじい勢いでヒグマに近づくと剣を振るって振り切った直後にバックステップで距離を開ける。

背の低い方が距離を取って背後を取ろうと後ろに廻り始めた。もう一度近づき攻撃してまた下がる。ヒット&アウェイかうまいな。

また近づいて攻撃したと思ったら刺せと叫び、後ろまで来ていた背の小さい方がタツクルをかましていた。ここからだと良く見えないが、身体ごとぶつかる勢いで剣を刺したのだろう。

それでも、致命傷を与えられなかったのか後ろに居た奴が離れてナイフを抜いた。おいおい、どんだけ硬いんだよ。

とりあえずこつちもなにか用意した方がよさそうだ。剣はどうだ？、駄目だまともに振れないから却下だ。だからと言って卵を投げるわけにはいかないしなあ。

また石でも投げるしかないかと、足元を探し丁度いい大きさの石を拾う。それを持ち前に視線を戻すとヒグマの前に居た背の高い方が膝を突いていた。まずいと思い、すぐさまヒグマに向かって石を投げた。

ヒグマに向かって弾丸の様に飛んだ石は腕の辺りに当たり腕がありえない方向に弾んで倒れた。良かった当たったみたいだ。

だが、まだ死んで無い様で起き上がろうとしている。そんな事はさせないともう1個石を拾うとヒグマに向かって投げた。

今度もちゃんと当たり、胸に大穴が開く。それを見届け、警戒しながらも近づく。ヒグマは口から血を吐き出しながら倒れた。やっと死んだか。

低い草を掻き分け目の前まで来ると背の高い方がこちらに振り向く。

「大丈夫でした？」

とりあえず聞いてみた。何だが呆然としているようだ。ふと、奥に

目を向けると背の低い方がナイフを構えたまま呆けていた。そんなに驚く物なのか？。

「ああ、あんたが今のやったのか？」

背の高い方が聞いてきたので、はいと答え近づき手を差し伸べてみる。向こうは一瞬戸惑った様だが、すぐに手を掴み立ち上がった。

「ありがとな、ほんと助かった。」

感謝されるとなんか照れるな。しかもめっちゃこの人イケ面だし、髪は深い緑色で後ろに流し目は淡く黄色味がかっていて彫りの深い顔は渋いダンディ系だ。

俺はそつち系じゃないぞ言っておくが。って、誰に言ってるんだ俺は。そう考えていると不審に思ったのか声を掛けてきた。

「どうした？あ、そうだ助けてもらったのに名乗らないとはすまない。俺はオルデンってんだヨロシクな、後ろに居るのはジエミドだ。おい、ジエミド何時までも呆けてないでこつち来いよ。」

「あ？あ、ああ」

まだ少し呆けたままだがジエミドと呼ばれた男はこちらに近づいてくる。こちらは髪がブロンドで短く刈り上げていて、目は青だった。なんだか雰囲気がかう、豪快で感じがする。

「いやあ、助かった」

そついつてバシバシと肩を叩いてくる。やはり見た目どつり豪快な性格のようだ。

「おい！、ジエミドお前は力が強いんだからそつバシバシ叩くな。大丈夫か？」



オルデンがこちらに尋ねてくる。

「いえ、大丈夫です。まだこちらは名乗ってませんでしたよね。私の名前は結城と言います。よろしくお願いしますね。」  
取り敢えず、下手に出ておこう。こちらの事をほとんど知らないしな。

「ああ、よろしくな、ずいぶん丁寧だなお前。所でさっきのはなんだったんだ？。飛び道具の一種か？その割には馬鹿みたいな威力だったが。」

そう、ジェミドが言う。

「いえ、これです」

そう言っておもむろにしゃがみ石を拾い見せる。そうすると、驚いた様子で嘘だろうと言うので近くの木に向かって投げつけた。ドカんとぶつかり木の表面が30センチ程抉れた。

「うう、嘘だろ・・・」

2人とも心底驚いた様子で木とこちらを交互に見ている。やっぱり異常だよなこの力。

「身体強化してるのか？」

オルデンが聞いてくる。身体強化って何だ？と聞き返すともっと驚かれた。魔法の1種か？良く聴いてみると主にこう云う事らしい。

曰く、身体強化とはやはり魔法の1種で身体に直接作用させる物らしい。ただ、身体強化と言っても限度があるらしく、普通なら1、5倍が限度でそれ以上すると身体が壊れるとの事。他にも色々有るらしいんだが、今はここを離れる為にまた後でと言われてしまった。

「で？、そろそろ移動するのですか？」

「その前にこれだけ倒したんだ。剥ぎ取らなくちゃな。」

「剥ぎ取りってやっぱりあれを？」

「当たり前だろ？、何の為に冒険者やってんだ。」

そう言われるも、まだ冒険者がどう言った物なのか把握してない俺は何をして良いか分からず2人を眺めるしかなかった。その間に、2人は手早く剥ぎ取りを行っていく。

その中で気になったのが、ヒグマもとい、ブラックベアー（まんまだな）をばらしている時に、身体の中から淡く光るコブシ大の石？が出てきたのだ。

気になって聴いてみると、お前ほんとにお前冒険者かと今度は呆れられてしまった。何でも、これは魔結晶と言い魔物はまず持っているんだそうだ。強ければ強いほど大きい魔結晶になり。この魔結晶は小さい奴は燃料に大きければ魔法具などに加工する為、良く売れるんだそうだ。

って事は、ワイバーンも持ってたって事か。惜しいことしたな、だが見るのも面倒だ諦めよう。

こう云うのは、その時の運だと思って諦めるのが肝心だと思う。また登ったら日が暮れるだろう。異世界に来て始めから野宿は勘弁願いたいし。

というわけで、剥ぎ取りも終わり村に向かって歩きだしたわけだ。



第1冒険者発見!! (後書き)

取り敢えず3000文字辺りで上げます。いやあ、全然進みません  
が気長に見てやってください。

## 村でのひとコマ(前書き)

書きたいことを書いていたら気づくといつもの2倍の文量になってしまいました。

## 村でのひとコマ

遂に、山の終わりが見えてきた。周りの木々が徐々に少なくなり視界が開けるとそこは一面の草原だった。緩やかに流れる風に背の低い草花が踊る。元の世界では余り見られない光景に目を奪われる。

「どうしたこんな所に何も無いぞ?。」

そうオルデンは言うが、いくら田舎に住むと言っても、広大な草原など始めて見たのだから少し立ち止まってもしょうがないと思う。俺がそう言つと、

「そこら中こんなもんだがな」とあきれた調子で言う。

「草原が珍しいなんて北部の出身なのか?。北部なら確かに見渡す限り山って感じたが。」

そうジエミドが聞いてきたので取り敢えず全部話すのは不味いと思いい、ぼかしながら話す。

「いや、北部がどんなのかは分からないが俺はこの大陸じゃ無い所から来たんだ。んで、山で迷っちゃまってな。山を越えて来たんだよ。」

「山を越えたって、上には危険な魔物が馬鹿みたいにいるんだぞ?。どうやって超えてきたんだ。」

「ああ、歩いて。」

調子に乗ってぼけてみた。なんかこいつら戦っている時は分からなかったが、いい奴そうなんだもの。

「いや、歩いてじゃなくてな、魔物と戦わなかったのかって事だ。」  
律儀にそう返すオルデンの横でジェミドが腹抱えて笑っている。よしっ。うけたぞ。

「魔物に襲われたのは1回だけだ。あんたらを助けた以外にはな。」

「どんな奴だったんだ？。上の方ならブラックベアー辺りがよく現れているが。」

「んつと、ワイバーンみたいな奴？」

それで通じるか分からないが、俺の知識ではあれを言い表すのがワイバーン辺りしかない。

「は？？？」

今度は固まってしまった様だ。何気にリアクションでかいな。

「ちよつと待て、もしかして山の頂上にいる奴か？。どうやって逃げてきたんだ。この前もCクラスのパーティーで討伐に行ったのにやられて命からがら帰って来たんだぞ？」  
そんなに強かったのかあのワイバーンしかもワイバーンで合ってたし。

「襲ってきたから倒した。なんか不味かったのか？。」

「倒したつてお前・・・嘘言うなよ。なんか証拠あるのか？。」  
証拠つて言えば剥ぎ取った牙と爪しかない。分かるかどうか判らないが取り敢えずポケットから取り出して見せてみた。

「でかいっ。これなら納得だなこのクラスだとドラゴン系しかこん

な爪持つてねえよ。」

ジェミドが答えた。確かにあんなのが熊でしたなんて言われたらもうこの世界で生きていく自信なくなるわ。

「本来ワイバーンはBクラスの魔物なんだぞ？お前はどのクラスなんだ。」

クラスって言うとおのカードに載ってた奴だよな。確か、Fだったよな。

「Fだけど。」

素直に答えると、またもや2人はフリーズしてしまった。やむなくカードを見せる。

「確かにFだな。裏は？おお！！なんだこの馬鹿見たいな能力の高さは。」

俺にも、とジェミドが言うので見せる。オルデンと同じ反応で思わず笑ってしまった。

「この能力値ならB、いやへたすりゃAだぞ。」

やっぱりこの数値は異常の様だ。そう言えばと????の事について聞いてみる。

「????なんて初めて見たぜ。オルデンはなんか知ってるか?。」

「俺も初めて見た。しかも、EXなんて最高値だぞ。こんなの、伝説の初代グランドマスターか魔皇竜殺しだけだったはず。」

なんか変なのキター。取り敢えずそのグランドマスターと魔皇竜殺しについて聞いてみる。

「初代グランドマスターってのは、この世界にギルドを始めて作っ



た賢者で、異世界から来たらしくてな。神と言葉を交わし世界の人々を魔王から守った御人だ。」

「魔皇竜殺しは暴虐の限りを尽くした魔王でしかも最上級のドラゴンだったんだ。それを、一太刀で切り捨てた武人で、『サムライ』と名乗ったらしい。だがな、その後の事はよくわかっていないんだぜ。なんか、カツコイイよな。」

オルデンとジエミドが話してくれたんだが、ジエミドの目がなんかキラキラしてる。新しい玩具を貰った子供みたいだ。それにしても、前者は日本人かはわからないが後者はあきらかに日本人だろ。

「俺も・・・いや、なんでもない。」

ここで異世界から来たなんて言ったら、なんかめんどくさい事になりそうだ。笑われる位で済むなら兎も角、要らぬ面倒事には華麗にスルースキル発動で行く事にしよう。

「それにしても腹減ったな。早く帰ろうぜ。」

森の出口辺りで話し込んでいた為、ジエミドがせかし始めた。

「そうだな。ユウキはどうする？」

「俺も、腹が減ったな。なんか食べたい。」

そう言えば俺もここに来てから何も食べてなかった。聞いた途端に気づくのだから少し苦笑してしまう。

「あ、そう言えばこっちの通貨持ってない。飯も食えないよ、どうしよう。」

「ワイバーンを倒した証拠を出せば、ギルドで報奨金が貰えるから

大丈夫だろ。」

「そうなのか？。良かった。」

「ホント何にも知らないのな。ギルドで登録する時教わつただろ。」  
登録などしてないが、そうだったなと適当に相槌を打っておいた。

ようやく歩き出し、村に向かう。2時間ほど歩いただろうか。もうそろそろ夕方と言っても差し障り無い時間帯だ。周りの風景に畑が見え始め、柵に囲まれた村コクラ村に到着した。木造の平屋建てがぽつぽつと建っており、踏み固められた道が奥に向かって続く。オルデン達と村の中心に向かって歩き、やっとギルドに辿り着いた。

ギルドは木造2階建てで、入り口が観音開きの木で出来た扉をくぐり中に入る。ギルドの中には四角いテーブルが10卓ほどあり食堂兼ギルドって感じだった。もうほとんどの席が埋まっている。俺達が入って来ると何人かこちらを見てすぐに話の輪に戻っていった。なんでも話しによると夜には居酒屋みたいになるとの事。あと、2階は小さいが宿泊施設だそうだ。

奥にあるカウンタにオルデンとそろって向かい、マスターらしき人にジエミドが声を掛ける。

「帰ってきたぜジヨブソンさん。」

「よう、帰ってきたか。ジエミドにオルデン、そこに居るのは誰だ？。始めてみる顔だな。」

「ああ。ユウキ挨拶しとけ、ここのギルドマスターのジヨブソンさんだ。」

「始めまして、結城と申します。どうぞよろしく。」

「ずいぶん丁寧だな。こちらこそよろしくな。」  
そう言つて、手を差し出し握手する。体格のいい髭面のおじさんで笑顔がちよつと怖かった。

「今日の成果は上々だぞ。ウルフを10匹以上仕留めたし、ベアーも倒したんだぜ。」

「ベアーか、そいつは凄いな。んじゃ、討伐証明出してくれ。」  
オルデンとジエミドが腰に着けたバツクから次々とウルフの尻尾やら、ベアーの牙やらを取り出す。最後に小さな角を10本ほど取り出しカウンタに乗せた。

「その角はなんだ？」

あの時には見なかった角を指差しオルデンに聞いてみる。

「ああ、これは、ホーンラビットの角で滋養効果があるんだ。今日はこれを狩りに行ってたんだがな。」  
そうなんだと頷く。話している内に査定が終わった様だ。

「まず、ホーンラビットの角の分がまず、貴銀貨1枚と銀貨3枚だな。」

差し出された銀色の丸い銀貨3枚と、丸いのより銀に近い色のひし形の銀貨が1枚。たぶんこれが貴銀貨だろう。その枚数を確認して小袋に入れるオルデン。

「あとこれが、ウルフとベアーの分だな。」  
そう言つて、先程より小さな金貨と貴銀貨1枚が出てきた。

「これでだいぶ懐が潤うな。」

「よしやつ、今夜は飲むぞつ。」

オルデンとジエミドが嬉しそうに声を上げる。

「俺もお願いします。」

「なんだ、お前も何かあるのか?。」

俺はポケットに入っていた牙と爪とカウンタに乗せて、これをお願いしますと言って微笑んでみた。ジヨブソンさんが驚く顔が目につく。

「こ、これは、もしかワイバーンの物か?。」

「ええ、そうです。」

「まさか、倒せる奴がこの辺にいたのか。おつと査定しなくちゃな。おい。ボードのワイバーンの紙剥がして来い。」  
ジヨブソンさんは驚きから立ち直ると、後ろに居た小僧に指示を出す。

「んんつゝ。ワイバーンで間違いないな。ちょっと待ってる。」

そう言うつと後ろにある通路に消えていった。戻って来るとカウンタに先程より一回り程大きい金貨を5枚差し出す。

「金貨5枚がワイバーン討伐の報酬だな。確認してくれ。」

確認して受け取りポケットに入れる。あとこれと言って上着に包まれた卵をカウンタに乗せ上着を解く。そこには、黄緑色の模様が入った卵が2個乗っていた。

「これはワイバーンの卵か。あいつはあそこで繁殖するつもりだったんだな。2ヶ月前にいきなり来たのはそういう訳か。でっ？、どうするんだこれは？」

「いやっ！買い取って貰えないかと思って。」

「いいのか？ギルドで売るより商人にでも売ったほうが高く売れるぞ？。」

「そうなんですか？。」

商人かつて事は交渉しなきゃならないって事だろ。俺はそういうの苦手なんだよな。

「面倒なんで買取お願いします。」

「そうか面倒か、わかった。」

笑いながらなにかの本を取り出し捲り出した。その間に、オルデンとジェミドが一斉に話し出す。

「あのワイバーンて子持ちなのか。そりゃ手に負えないはずだぜ。」

「俺達も行かなくて良かったな。子持ちほど厄介な物は無いしな。」  
元の世界でも子持ちの猪とかは、かなり危険で近づかないようにしてたしな。俺が住んでた町の山のほうは猪とか猿とか普通に出て来たしな。

「査定出来たぞ。間違いなくワイバーンの卵だほら此处に載っているだろう。」

先程捲っていた本をこちらに見せてきた。そこには、ここにある卵

と同じ模様の卵が書かれており。上の方にワイバーンの卵と書かれている。

「こいつひとつで金貨2枚と半金貨1枚、あわせて金貨5枚だ。商人に売れば、最低でもひとつ金貨3枚はしたるうに。ほんとに良かったのか?。」

「ああ、いいよ。交渉するの苦手だし。」  
値切ったことさえない俺には商人の言うまま売ってしまいそうだ。今相場を知ったばかりだしな。

「そうか。んじゃ、金貨5枚だ。」  
金貨5枚を受け取り、またポケットに入れる。チャリチャリと音が鳴る。

「これで終わりか?。そういや、ギルドカード見せて貰ってなかったな。オルデンのついでにやっちまった。カード持ってるんだろ、みせな。」

「あつそつか。出さなきゃならなかったな。いつもの癖で出さなかつたよ。」

取り敢えず知ったかぶりして左のポケットからカードを出してジヨブソンさんに渡す。

「カガミユウキか、いい名だ。んっ?、F?これは本当か?。だが、ギルドカードは偽装不可だしな。まあいいワイバーンを倒せるならこんなランクのままにしておく訳にはいかないしな。」  
そう言って淡く輝く水晶球を取り出して、そこにどうやってか挿し込むと水晶球が強く輝いたと思うとまた元に戻った。

「ほら、出来たぞ。これでランクが上がったぞ。」  
カードを返して貰うとカードの内容が変更されていた。

表には、

名前	加賀美 結城 <small>かがみ ゆづき</small>
種族	人間
年齢	21
出身	――
性別	男
ランク	C

裏には、

ちから	A -
すばやさ	B
ぼうぎょ	C +
まりよく	F +
しゅうちゅう	C +
????	EX

称号【異世界神の情け】 【異邦人】 【ワイバーン殺し】

まりよくと称号の所が変わっているな。

「確認したか、んじゃ、終わりだな。改めてユウキ、これからもよろしくな。」

ニカリと笑い、言う。やっぱり、髭面で笑うの反則だよジョブソンさん。

終わったので飯、飯つと2人と共に空いているテーブルに座り、お品書きを見る。だが、なにが書いてあるのかさっぱりだった。確かに字は読める。だが、オルドの香草焼きとかミルモの丸焼きとか書かれてもホントさっぱりだ。

店の人のお勧めを頼めば早々間違い無いだろう。なので、さっそく頼む事にする。

「店員さん、お願いします。」  
すると、看板娘なのだろう前掛けを着けた若い女性が注文を取りに来た。

「はい、注文をどうぞ。ってオルデンさんとジェミドさんじゃないですか。あらっ？こちらの方は見ない顔ですね。私は、クレアって言いますよろしくね。」

笑顔で可愛い顔をこちらに向けてくる。少しそばかすが目立っているが充分綺麗で惚れてしまいそうだ。

「えっと、クレアさんのお勧めで3人前おねがいます。」  
俺がそう言つとオルデンが俺も3人前とビールと話し。ジェミドは5人前と蒸留酒をなぜかちからこぶを作りながら言った。

「お勧め1人前とビールと蒸留酒ですね。少々お待ちください。」  
笑顔で繰り返すと踵を返そうとしたところで、あ、俺もビールでと追加注文しておく。

「いや、腹減ったな。今日は思わぬ報酬に新しく出会った友人良い事尽くめだな」

「いや、ブラックベアーに殺されそうになるのが良いことか？だが、



ユウキに出会えて良かったのは間違いないが。」

「俺もお前らみたい楽しい連中に出会えて良かったよ。」  
そんな事を話していると、木の小樽になみなみと注がれたビールと蒸留酒を持ったクレアさんがあらわれて、料理はもう少し待ってねと言って置いていった。

3人でジヨッキお持ち上げ、乾杯の音頭を取る。

「……新たな友に乾杯!」  
ガコンツと良い音がしてジヨッキを傾け一気に飲み干す。ぷはっあ  
あすきっ腹にビールが効くな。クレアさんもう1杯ずつ追加で  
っと言って料理を待つ。

5分後にクレアさんが料理と酒の追加分を持って来て、余りのみ過ぎないようにねと言ってほかの席へ注文を取りに行った。クレアさんの選んだ料理はテーブルいっぱい置かれ、美味しそうな匂いが立ち上る。何かの肉料理の様だ。その他にもサラダの様な物まである。

思わずひとくち口に放り込むと肉の芳醇な脂の旨みかくちいっばいに広がりため息が出た。いくら空腹が最高のスパイスだったとしても、うまいもんはうまい。だってうまいんだもの。大事なことだから2回言ったぞ。

そこからは会話もそこそこにひたすら食って飲んでを繰り返した。料理をすっぱり食べ終えて、ようやく心地つくとオルデンが赤らんだ顔で頭を揺らしながら言ってきた。

「んあああ、ユウキは今晚どうすんだ?泊まるあてはあるのか?。」

「いやあ、ないよお。それがどうかしたのかあ」  
おれも結構酔ったみたいだ。ジエミドなんてもはや皿のかたづけか  
れたテールでジョッキを持ったまま突っ伏していた。まあ、蒸留酒  
をあんなにガバガバ飲んでたらしようがないか。

「んじゃあ、こここの2階があ宿だつて教えてたよなあ。たしかまだ部  
屋が空いてた筈だからここに泊まればいいんだよお。」

「ああ、そうするよ。」  
という事で、お合いそした俺達はカウンタへ行き部屋を借りた。料  
金は一泊銀貨7枚だった。2階に上がり部屋の前で挨拶して別れる。  
ジエミドはオルデンに担がれていたが。部屋に入り奥にあるベット  
に倒れ込む。だいぶ固めのベットだが触り心地のいい冷たいシート  
が気持ちよくてそのまま眠ってしまった。

こうして異世界に来て1日目を終了した。

## 村でのひとコマ（後書き）

お酒の勢いは恐ろしいですね。なんだかんだと日本酒1本720m  
1飲んじやいました。補足で貨幣価値は半銅貨 5円

銅貨 10円

貴銅貨 100円

半銀貨 500円

銀貨 1000円

貴銀貨 10000円

半金貨 50000円

金貨 100000円

貴金貨 1000000円

法貨 10000000円

銅貨銀貨金貨は円形のコイン状

半銅貨半銀貨半金貨は一回り小さいコイン状

貴銅貨貴銀貨貴金貨はひし形のコイン状

法貨は板状のカードの様なものです

## 武器屋で買い物を

小鳥達の喧しいさえずりで目覚め、少し痛む頭を抑えゆっくりと起き出す。見慣れない部屋を見渡すと、通りに面する窓の隙間から朝日が射し込んでいた。木製の窓を開けて外を見ると清々しい空気が部屋に流れ込んでくる。大きく背伸びをして肩を伸ばし身体を解す。

少し体臭が気になった。元々、体臭は薄いほうだといわれているが昨日、1日の殆どを歩いたり走ったりしたのだ仕方ないだろう。風呂を借りねばと思い、ふと、そもそも風呂が有るのかどうか知らなかった。まあ、今から聞けば良いだろうと部屋を出る。

1階に降りるでカウンタに向かうと、もう仕事を始めているジョブソンさんに挨拶する。

「おはようございます、ジョブソンさん。聞きたい事が有るんですがいいですか？」

目上の人に対する礼儀はしっかりとしないとな。これでも社会人だったしこれくらいちゃんとしておけば心証もいいだろう。

「ああ、おはようさんユウキ。昨日も思ったがやけに丁寧だな。冒険者でここまで丁寧な喋りする奴なんていないぞ。どこぞの貴族かと思うくらいだ。まあ、貴族は俺なんかに丁寧に喋らんがな。でっ？、なんのようだ？」

貴族か、あんまり丁寧なものも下手な誤解をもたれそうだが癖になっちまってるしな。徐々に変えていくしかないよな。

「あの、ここに風呂ってありますか？。あるなら借りたいんですけど。」

「風呂か、あるぞ。昨日説明したんだがな。結構酔っていたみたいだし聞いてなかったみたいだな。んじゃ、もう1回説明するからな。1回半銀貨1枚で風呂の鍵が借りれる。そして風呂場だがこの奥にある。青い札が掛かった方が男湯だからな。間違っても赤い方に入るうとするなよ。まあ、鍵が無きゃ入れんがな。たまに鍵を掛け忘れる奴がいて面倒が起るがお前も気をつけるよ。」

豪快に笑いながら忠告してきた、そんな事するつもりは無いが。

「解りました。んじゃ、これでおねがいします。」

そう言つて、銀貨を差し出すと、お釣りの半銀貨と鍵と手ぬぐいを渡してくれた。礼を言つて奥に入り、青い札の掛かった扉を鍵を開けて入る。そこは狭い脱衣所で、棚にかごが置かれているだけの殺風景な所だった。

服を脱ぎかごに入れて、風呂場に入る。6畳ほどの風呂場はモザイクタイルが壁一面に施されており、さながら森の中にいるような錯覚を起こした。なかなか趣味がいいな。

奥に広々とした風呂があり右側の壁になにやら書かれていた。【ここに魔力を流すとお湯が出ます】なにやら小さな魔方陣らしき物の上になにやら書かれていて。魔方陣をぺたぺた触れてみると、触れた時だけ少しだけ魔方陣からお湯が出た。

面白いなど何度も触つたりして遊んでいたが、あまりお湯が出ない事に飽きて、本題の風呂に入る事にする。石鹸など無い為、お湯で流しながら身体を洗う。最後に掛け湯をして、湯船にゆっくりと入ると、思わず声が漏れる。

「ああ〜いい湯だ〜。」

しばらくお湯を楽しみ、あがって身体を拭き着替える。脱衣所から出て鍵を閉めるとカウンタに戻り手ぬぐいと鍵を返す。

「いや、いい湯でした。」

俺がそう言つと、ジヨブソンさんがそれは何よりだと返してくれた。

風呂に入つてすっきりしたら急に腹が減ってきた。そのまま、何か食べれないかと聞くとまだ食堂が開いていないらしい。だから人が居ないのかと納得し、食堂が開く10時まで部屋で時間を潰すことにした。

部屋に戻り手持ち無沙汰で、歩き回ったりベットに座つて剣を眺めたりして暇を潰すと下がにわかには活気づき始めた。腕時計を確認するともうそろそろ食堂の開く時間だった。そのまま下に降りてみると、早くも数人がテーブルに着き食事を取っていた。

では俺も、とカウンタで料理を注文する。まだどれがどんな料理かわからないが、適当に選んでみる。当たりだといいんだが、そうこうする間に料理が出来上がり目の前に来た。

来た料理は大盛りのサラダと何かの肉料理だった。いただきますと心の中で唱え、食べ始めると階段からオルデンが姿を現した。

何だが少し顔色が悪いようにも見える。オルデンはこちらに気づくと隣に座り、料理を頼んだ。

「おはようユウキ。なんだ、ずいぶん調子がよさそうだな。」

「おはようオルデン。さっき、風呂に入ったからな。調子もばつちりだ。ジェミドはどうしたんだ?。」

ジエミドが降りて来ないことを聞いてみる。昨日、飲み過ぎていたみたいだから寝坊でもしたのかと聞いてみる。

「ああ、今頃ジエミドはベットで唸ってるさ。依頼を成功させるといつも飲みすぎるんだ。何回やったら懲りるんだろうな。」

そう言っただけでオルデンはちからなく笑った。あんたも二日酔いの顔してなにを言ってるんだか

と、心の中で思いつつこちらでも苦笑で返す。

こちらが食べ終わり、食後のコーヒーらしき物を楽しんでいると、オルデンも食べ終わったのか、話しかけてくる。

「ユウキは今日どうすんだ？。俺達は2、3日休暇を取るが。何かする事でもあるのか？。」

「取り敢えず、武器屋かな。拾った剣の鞘がないからどうにかしないと。」

昨日拾った剣は刀身を上着で覆ってあるが何時までもそうして置く訳にはいかないだろう。

「そうか。武器屋の場所は知ってい……る訳ないか。しょうがない、俺が連れて行ってやるよ。」

「ありがとな。んじゃ、準備してくる。」

コーヒーを飲み干し、代金をカウンタに置くと部屋に戻る。準備と言っても剣を持っていくだけだが。剣を持って下に降り、カウンタに出かけると声をかけ鍵を預ける。

すぐに、オルデンが準備を整えて降りてきた。2人でギルドを出て道を右へと進む。木造の建物の間を話をしながら歩くとあっという

間に着いた。武器屋は店先に剣と槍が飾ってあった。扉が開け放しており、中に入ると先客がいるようだ。

先客は店主と話をしており、オルデンとこちらの番になるまで店の中を見ている事になった。色々な武器が棚や底の深い傘立ての様なものに立て掛けられていて、見ているだけで興味が尽きない。

男ならこの感覚に解ってくれるだろう。ホームセンターとかの工具を見て廻っている感覚に近い。あれは何かを作り出す物だがこれは誰かを傷つける為の物と、違いはあるが。剣の棚を見ていると先客が帰るようだ。

気づいて店主の方へと行こうとすると、なぜか先程の先客がこちらに向かってきた。

「なあ、あんた。その剣如何したんだ？」

いきなり声を掛けられてびっくりしていると手に持っていた剣を見せてくれと金髪の大柄の男が頭を下げて頼まれた。

「いいけど。その剣は昨日ニズク山で見つけた物だが何かあるのか？」

剣を渡すと、彼は巻いていた上着を外して剣を見た。そして何か確信したのか頷くと俺に剣を返してきた。そしていきなり膝を床につけると土下座しだした。

「頼む。その剣を俺に譲ってくれ。言い値で払うから。」

いきなり土下座した彼は大声で懇願して来る。何故だと聞くと、それはこの前ワイバーン討伐に行った時に負けて泣く泣く置いてきた物だという。そしてこの剣は父親から譲り受けた物でとても大事にしていた物だったようだ。



「俺には、もうそれしか親父の遺品が残っていないんだ。頼む。」  
そう言われると返してもいいような気がしてきた。そこでオルデンに目線を送ると、お前が拾ったのだからお前の物だ好きにしたらいいと言ったので剣を返すことにした。

「立ってください。これはあなたにお返しします。」  
立ち上がった剣を受け取るといくらだと聞いてきたので御代は要らないと言ったら、そうはいかないとなぜか口論になってしまった。

「いらぬ、必ず払うと、いい加減疲れてきた頃、さつきから黙っていたオルデンがいい方法があると言ってきた。」

「それはな、こいつに飯を奢って貰えばいいだよ。剣の代金としては足りないがユウキは持って来ただけなのだから、それでいいだろ？」

それを聞いて、いい考えだと納得し大柄の男に言うとしびしびだが納得してくれたようだ。夕方にギルドで落ち合おうと約束すると剣を大事そうに抱えて帰っていった。

ふうと、疲れてため息を吐くと店主が話しかけてきた。

「よう、大変だったな。見る分には面白かったが。」  
そんなに面白いもんかね。その前に止めてくれよと思っていると、オルデンがこれで剣がなくなってしまったな何か新しい武器でも買うか？と、聞いてきた。

「それなら、なにがいい？。王都の様にそんなに種類は無いが見てつてくれ。」

と笑顔で勧めてきた。なにが良いかと考え、取り敢えず剣で頑丈な

のと注文を出す。そうすると店主は予算はいくらだと聞いてきたので、金貨5枚と答える。今ある全財産の半分だ。

「金貨5枚か、ならこれなんてどうだ？」

そう言つて店主が取り出したのは剣が2本と刀が1本だった。刀があるのかと驚きつつまず、刀の方を取り鞘から抜いてみる。これは野太刀だな、長い全長の刀で、刃についてはよく解らないが綺麗な刀身が窓から入る日差しに煌めいた。かっこいいと思いつつながら鞘に戻して机に置く。

次は、短い方の剣を取り抜いてみる。刃は両刃で短く40センチ程で淡く銀色に輝いた。接近戦での振り回し重視って感じたな。こちらにも机に戻して最後の剣を取る。

こちらはひたすらでかいって印象で、150センチに迫る全長の両刃の剣で刀幅も20センチ位で厚さも2センチ程だった、それでも軽々持ててしまう自分のちからに驚きつつよく眺める。これは、切るより鈍器としての使い方も出来そうだ。

「どうだ？、気に入った物はあったか？」

店主が聞いてきたので、この中でちから押しに向いているのはどれと聞くと、迷わず最後に選んだ剣を指差した。ではそれと云つて代金を払う。金貨4枚と半金貨1枚貴銀貨2枚だった。でかい買い物だったな。剣を受け取ると、おまけだと鞘に通す皮のベルトをくれた。

礼をいって、武器屋を出る。さつそく腰に着けてみるがどう考えても鞘が地面を擦ってしまう。

「ユウキ。それは、背中に背負う奴だぞ。わざとだよな？」

オルデンが笑いをかみ殺した様に言ってくる。わざとだよと顔を赤くしながらいそいそとベルトを付け直す。背中に斜めに背負うと肩口に柄が覗いていた。まだ笑いを抑えているオルデンににらみを利かせると、あわてて聞いてきた。

「でっ？予定は狂っちゃったが武器屋の用事は済んだし如何する帰るか？」

「そうだな、と返してギルド宿に向かって歩き出した。」

武器屋で買い物（後書き）

今日もやっとな書き上げました。目が疲れてぼやけて見えないのには  
参りました。

## 飲み会は計画的に

で、ギルドまで帰ってきたんだが。

まだ、夕方まで時間がありそうなので、ジェミドの様子でも見に行ってみようか。そう思って、カウンタで鍵を返してもらい2階に上がる。ジェミドの部屋は左右に6部屋ずつある1番奥の右側にあった。

ちなみに俺の部屋は階段から入って左側2番目だ。まあ、そんな事はどうでも良いか。ジェミドの居る部屋の前まで来て、取り敢えずノックしてみる。

「ジェミド、大丈夫か?。」

ドアの奥のほうから入っていいぞと返事があったので、俺達は部屋に入った。ジェミドはベットに座って剣を磨いていた。ぼろきれに磨き粉を含ませて少しずつみがく。その姿は、まるで歴戦の戦士そのものと言っても過言では無い程だった。

「なあ、ジェミド。二日酔いは治ったのか?。」

ジェミドの顔色はどう見ても良さそうだが、一応聞いてみる。

「ああ、もう昼過ぎだぜ。大丈夫さ、なんだったら今晚だって飲めるぜ。」

「朝には、もう二度と飲まないって言ってただろ。」

「そんな事言ってたか?。記憶に無いがな。」

そう言っただけで豪快に笑ったジェミドにオルデンが説教するが、馬に念

仏の様だ。

「ふう、ユウキもなんか言っちゃってくれ。俺じゃ、いつも説教してるからかまったく堪えないんだ。」

ジエミドを叱っていたオルデンがこっちにお鉢を回して来た。ならここは期待に応えないとな。

「なあ、ジエミド多分今日も飲み会になりそうなんだが、来るか？」

「

「ホントか？。行くぜ、今晚はなに飲むかな。蒸留酒は高いから、ビールでいいか。」

即答だ。本当に今まで説教されてた様には見えないが。あつ、オルデンが額を押さえている。俺も苦笑をしつつ、昼にあった事を説明する。

「あゝ。だから、新しい剣を背中に下げているのか。なるほどな。んじゃ、もうそろそろ夕方だし下行くか。」

おもむろに懐から懐中時計を取り出し、ジエミドはそう言う準備を始めた。俺も腕時計を確認して見る。確かに夕方と言ってもいい時間帯だった。そんな俺達を見ていたオルデンは、諦めた様にため息をついて苦笑を浮かべる。

「ここには、俺の味方をしてくれる奴は居ないようだ。飲みに行くのは良いが、ジエミド今日こそは飲みすぎるなよ。」

オルデンがジエミドに釘をさす。あまり意味はなさそうだな。

「よっし、用意できた。行こうぜ。」

そう言ってきたので3人で下に降りた。

1階に下りると先程の男と何人ががなにやら談笑をしている所で、こちらが近づくと彼が気づいた。今思ったのだが、彼の名前まだ聞いてなかったな。まあ、今から聞けばいいか。

「やあ、来たか。ユウキさん。んっ？、そちらは先程見無かったが誰？。」

ああ、さっきはジェミドは居なかったからな。そう思っていると、ジェミドが自分から挨拶していた。

「おう、俺の名前はジェミドってんだ。よろしくな。」

「こちらこそよろしく。」

「っで、そちらの方は？。」  
彼と一緒にいる人の紹介を頼む。

「ああ、そうだった。俺達はチーム組んでてな、こっちのでかいのがアンリでこっちの小さいのがトマで、彼女はシャルル。最後に俺が、アルフレドって言うんだ。」  
アンリはがっしりとした戦士系で濃いブロンドを短くそろえていてトマは小柄で青い髪、足元まであるマントに杖を持っていた。

格好から察するに、魔術師みたいだ。シャルルと呼ばれた女性は長い金髪で背中に弓を背負っている。そんなに目立つ容姿ではないものの意思の強そうな眼差しは好感が持てた。一通り紹介を受けて、名乗り合つとテーブルに移る。

テーブルに着き、近くに居たクレアさんに注文を頼む。食事が来るまでの間に色々聞いてみた。

「あの場所に剣が有ったてことは、ワイバーンに挑んだって事だよな。どうしたんだ？」

「いやあ、あれは失敗だった。思った以上にワイバーンが強くてな。俺が腕一本折られたし、アンリも骨にひびが入ったしな。ウインドカッターを掻い潜るのは至難の業だった。なんせ風の刃だからな見えななんだ。トマの指示が無ければ近寄ることすらできなかったよ。」

「そうなのか、でもあんな高いところに剣が刺さるなんてよっぽどだろ。」

「まっ、そうだよなあ。トマのおかげでなんとか近づくことが出来たんだが、近づくとも噛み付きや尻尾の攻撃でちまちまと攻撃するしかないからな。トマとシャルルが後方支援してくれたからなんとか生きて帰ってこれた。あの剣は、尻尾の攻撃を受け流そうとしたら剣ごと持ってかれちゃってな、その時に腕もやられたのさ。」

「ほんとあのまま続けていたら間違いないで死んでたな。まあ、それのおかげで大損しちまったがな。」

アンリがため息を吐きながら言う。

「たしかに、治療費も馬鹿にならないですしね。登った時にブラックベアーを倒してなきゃ、大赤字だった。」

トマがそう同意し、

「それでも、とんとんでしょ。これで剣まで新調してたら赤字だったじゃない。ほんとありがとね。」

シャルルさんがお礼を言ってきた。



「お役に立てたのならよかったです。」  
そう返していると、クレアさんが大量のジョッキを持って現れた。

「お待ちどうさま。注文のビールです。」  
器用に両手で7つのジョッキを置くと、また厨房の方へと戻っていた。

「ではっ、乾杯しますか。乾杯!!。」  
ジョッキを高らかに上げたアルフレドが乾杯の音頭を取った。

「……乾杯っ!!。」  
乾杯をして1口飲みテールに戻す、やっぱりうまいな。そう思っている、トマが話しかけてきた。

「ユウキさん、ワイバーンをどうやって倒したんですか?。たった3人で、しかも3人も戦士ですよね。」  
「どうやら、オルデンやジェミドと一緒に倒したと思われるようだ。考えたらそうだな、ひとりで倒すなんて非常識もいいところらしい。」

昨日の1件で俺も、学習したぞ。ここははぐらすのが吉だな。そう思って、オルデンにむかって視線を飛ばすとオルデンも頷いた。だが、空気を読めないジェミドが否定した。

「いやあ、俺達は何もしてないぜ。ユウキが1人でワイバーンを倒したんだ。俺達はブラックベアーに襲われているときに助けてもらってな。ほんと助かったぜ。」

「……はっ??」「……」  
アルフレド達が驚きすぎて固まってしまった。もう見飽きたよそう

いうの。いち早く復活したトマがあわてて聞いてきた。

「ひつ、1人で倒したなんて嘘ですよね?。」

「ああ、嘘じゃないぞ。しかも無傷でな。」

「またもや空気を読めないジエミドがなぜか、自慢げに話す。ああ、  
どンドン深みに嵌まっていく。」

「無傷でっ?。本当にどうやったんですかユウキさん。」  
ええい、もう野となれ山となれだ。

「いやあ、岩をぶつけたただだよ。」  
そう言っと、またもや呆然とするアルフレドたち、だからその反応はもう飽きたって。

「だが、岩でどうやってたおすんだ?。」  
それはもっともな質問だが、岩をぶん投げて当てたとしかいえない  
しなあ。どう説明したもんか。そう考えていると、トマがなにやら  
思いついたようで聞いてきた。

「もしかして、ユウキさんは魔法剣士ですか?。土系の魔法の中に  
岩を操作する物もあったはずですよ。でも、戦士の人が身体強化以外  
に戦闘中で魔法を使える人なんて始めて見ました。」  
何か勘違いをしてくれた様だ、面倒だからそれで行こう。だが、戦  
闘中に戦士が身体強化以外の魔法が使えないのは何か理由があるの  
か?。取り敢えず聞いて見ねば

「それはどうして?俺のいた国じゃそれくらい普通だぞ?。」  
聞き出すために、嘘をつく。少し心が痛むが、情報収集の為と割り  
切ろう。俺がここじゃない大陸から来たと説明する。

「え、そうなんですか？。身体を動かしながら魔法の為の思考をするのは大変だと思うんですが。」  
詳しく聞くと、魔法の執行には効果を思い浮かべながら魔力を込めて放つ物らしい。なお、詠唱となる言葉は必ずしも必要ない様だ。イメージしやすくするのに一役買っているみたいで、殆どの場合詠唱するらしいが。

だから前衛の戦士が戦いながら使うのには適していないらしい。ちなみに、身体強化は魔力を身体の中で循環させて、身体を補助するものだから、そこまでイメージは必要ないらしい。

逆に、そちらの魔法はどういった物かと聞かれたが思考の中で補助の為の魔方陣を描いて、魔力で浮かべて効果を出す物としておいた。昔見たファンタジー物でこんな設定があったなあと思い出しながら話しておいた。

「へえ、ほんと為になりました。ありがとうございます。」  
新しい魔法の話に熱心に聞いていたトマが笑顔で言ってきたので、嘘を言った手前じくじくと心が痛んだ。だからこの魔法をこちらの人が使えるかは解らないからなと、一応断りを入れておく。

「はい。でも、研究の余地はありそうですね。これが広がれば前衛の人も魔法が使ってパーティーの負担が減ると思いますし。」  
そうか、頑張れとだけ返してエールを送る。そうしていると料理が来たみたいだ。

クレアさんが持って来た料理は、何かの肉のから揚げみたいな物と、パンそして具沢山のスープにサラダと美味しそうな物かいっぱいあった。

から揚げもどきを一口頬張ってみると、少し硬めではあったがまさしく鶏肉のから揚げであった。下味のついた鶏肉はひと噛みするたびに旨みを出しとても美味しい。これは食が進む。そして、ビールともよく合って皆、ビールのお代わりをしつつ大いに食べた。

「ああ、腹いっぱいだ。いやあ、飲みすぎた。」  
すべての料理を食べ終え、2時間程たった頃。宴もたけなわになった頃に解散することとなった。何でだろう、昨日よりひどい惨状が広がっていた。生き残ってるのは、俺とオルデン、アンリだけだった。

そりゃあ、あんだだけ豪快に飲めばこうなるよな。お代をオルデンが自分とジェミドの分を、アンリが残りの分を払い、歩けないトマとアルフレドを担いでふらつくシャルルとともに近くに借りている宿へと帰って行った。

俺達も部屋に戻るかといった所で、ジョブソンさんが近づいてきた。

「すまんが、ちょっといいか？忘れてたんだが今日も泊まっていたんだよな。今晚の分を貰ってなかったから今もらえるか？」  
「そういえば、今日の分を払っていなかったな、面倒だから3日分を先払いしておこうか。そう思って、3日分の代金貴銀貨2枚と銀貨1枚を渡す。」

「ちょうど、3日分だな。帳簿つけなきゃな、おやすみ。」  
そう言っつて、ジョブソンさんはカウンタに戻って行った。おやすみなさいと返した俺達はまたも飲み潰れたジェミドを引きずりながら2階にある部屋に戻っていった。



## 思考と魔法と考察

この世界に来て10日が過ぎた。まあ、ぼちぼちやってるさ。昨日もオルデン達と、村の西ある草原で魔物を討伐したし。

まだまだ、知らない事や見た事も無い物などいっぱいあって毎日が驚きの連続だ。何より驚いたのは、魔法の仕組みについてだ。

つい、3日ほど前にこの村に来た行商人が持っていたある本を譲ってもらったことに由来する。その本は大分くたびれていたが表紙にこう書かれていた。【魔法の使用とその作用について】

まさしく、魔法の制約に関することや魔力の行使における作用が書かれており魔法使いにとって大切なことが載っていた。だが、普通このような本は魔法使いは読まないらしい。なぜなら、魔法使いは自分で魔法を行使して確かめた方が早いからだそうだ。

その為、小難しい事が書かれている本は好まれない。しかも、魔法の使用に関する魔方阵は載っていない為、一般の人も求めることが無い。

この世界における魔方阵は設置式で、描いた魔法陣に魔力を流し込んで魔法を行使する。これならば、思考せずとも魔力を流せば使える為に一般に広まったものの、描くのには時間がかかりさらに一定の効果しか得られない。効果が強い物ほど描く量が増え、戦闘には向かず生活に特化した物になったらしい。

さらには魔力は本人から離れれば離れるほど弱くなっていく為、長距離の発動には向かなかった。それそのものは個人の魔力量で解決

出来るがその為には多くの魔力を籠めなければならず、その方法は効率が悪すぎて使い物にならない。

そのため、魔法使いは単独行動は取らず前衛と一緒に戦うことが一般的だ。だが、解決には程遠いが効率を良くする方法を考え出した魔法使いが現れた。その魔法使いが使った魔法は【固定化】と呼ばれる物で、発動した魔法を持続する為の魔力を軽減することが出来る。

また、固定化を施すことで発動距離を伸ばすことが出来る。たとえば、魔法使いの標準的な魔法【ファイアボール】これは魔力を炎に変換させ球体を描くように巡らせる魔法だが発動から相手に飛ばし相手に当たるまで魔力を籠め続けなければならず結構な消費量になるが、発動した時に固定化を掛ければそのままあまり魔力を籠める必要が無くなる。

誘導するのに魔力は必要だが、一般的に必要な魔力量の2分の1程度に軽減できる。それにより1人で2倍近くの戦線維持が可能になる計算だ。まあ、そう単純には行かないだろうが、もし1対1の場合同じ魔力量なら圧倒的に有利になる事は自明だ。

だが、固定化は一般の魔法使いの間では広まらなかった。なぜなら固定化を使用するには、物理現象について正しく理解しなければならず魔術専門の学校を出たとしても1割程度しか使用出来ない程なのだ。まあ、この文化レベルで言えば1割でも凄いことだろう。

実際、魔法は効果をうまくイメージ出来れば使用できるため物理など知らなくても使うことが出来る。その為に科学が発展しないのだ。

そもそも、魔力とは何なのか説明できる魔法使いは少ない。これは、

この本を読んでから疑問に思っただけ聞いて回って解ったことだが生まれた時から感じる事が出来たことに所以するだろう。何の疑問も持たず、日常的に魔法を行使する世界で生活すればそう云う物として認識されたに違いない。

これこそ、この世界じゃない魔法も魔力も無い世界から来た俺だからこそその視点だ。確かにこの世界に来た時からある、なんとも言えない違和感が魔力なのだろう。それが解った時、どうにかしてそれを使おうと思った。

使うのには苦労したが自転車の乗り方と同様に動かし方さえ解ればあとは簡単で、魔力を身体から出しながら1箇所を纏めそこに火のイメージを付加するとポオッと火がついた。

イメージしたのはライターの火ぐらいな物だったんだが30センチ位の火が出来てしまいあわてて消したのはご愛嬌だろう。宿で本を片手に実験していたがこれでは火事を起こしてしまうと、それから村から離れた誰も居ない草原などで実験していたんだ。

実験の結果わかったことは、魔力はある種のエネルギーと言っても過言では無く、ある意味、パラジウムみたいな物として俺は認識している。パラジウムは他の物質と混ぜることでまったく違う物質を作ることが出来るので有名だ。魔力は意思の力により形を変え現象として姿を現す。物質と現象ではまったく違うが何より本人の認識が大切なのでこの考えで落ち着いた。

そして俺はなぜか魔力を視る事が出来た。まあ他の魔法使いも見るからこそ出来ないらしいが肌で感じることで解るみたいだ。ちなみに、普通の人は自分の魔力はわかるが自分以外となると解らないらしい。



同じ魔法を使っても籠める魔力量で威力が増減するが何より大切なのは思考することイメージを限りなく本物として扱うことで魔力をセーブしながら同じ効果が出せる。

また、本人の資質による所も大きくてイメージとしては蛇口を思い浮かべてみるのが解り易いと思う。この蛇口は1人1人大きさが異なり一度に放出できる限界が異なる様で蛇口が大きければ大きな魔法が使えるのだが、良い事ばかりではなく弱い魔法の加減が難しいといったデメリットもある。

俺はその蛇口が大きいみたいでライター程度の火がどうにも出来ない。練習によってある程度は小さく出来たがそれでも10センチ程度の物しか出来ていない。

そこで思ったのは何故、一般の戦士であるオルデン達が身体強化の魔法を使う事が出来るのか、一般の人間では蛇口が細く殆どの魔法が使用出来ない。だが魔力を放出せずに体の中に練りこみ身体に向かって魔法を使うことで身体強化が出来上がるからだ。その為、戦士系の人たちは大なり小なり身体強化にお世話になっている。

これにもメリットとデメリットがあり、身体に直接使うということ  
は身体能力を向上させるが、身体の限界は決まっている為それ以上  
に使うと身体が壊れてしまう。それは鍛えている方が出力も出やす  
く身体も壊れにくいので戦士系にはぴったりだが、魔法使いなどが  
使うと自身の魔力量に対して身体が追いつかないためあつという間  
に自滅してしまう。

その為に魔法剣士は殆ど居ない、それを目指したとしてもどっちつかずの中途半端になってしまうのが落ちだ。だが、俺には科学的な

知識が一応ではあるがあるため魔法を正しく認識でき効率的に使うことが出来た。この収穫は大きいだろう。だが、ひとつ問題が残った。たままだ。

それは魔法を使うたびに身体的には無く精神的に疲れるという事だ。これには霹靂している。使いすぎると身体はまったく問題ないのにも係わらず立っているのも億劫になってしまう。トマに聞くとそう言うものですと笑われてしまったが、どうにかできない物だろうか？。

どうにも、ここでは情報の集まりが悪い。ここは片田舎もいい所だからしょうがないが、やってくるのも出て行くのも冒険者や行商人ばかりでなかなか有益な情報にめぐり遭わない。

もっと栄えている所に行けば違うのだろうか、どこに何が在るのかも解らない状態では行くことすら出来ない。ましては旅の仕方わからない為、まずそこも調べなければならぬだろう。

そこを念頭に動いてみようか。そう考え、今日の実験も終わりにしようとして腰掛けていた小さな岩から立ち上がる。もうそろそろ、日が翳り始める時間帯で青空とオレンジ色が交わる西の山々がとても綺麗だ。あと、1時間もしない内に宵の口に入ってしまう。

夜は魔物の活動が活発になるから早く帰らねばと、座っていた辺りを確認して歩き出した。本格的な夏の香りが風に乗って顔をくすぐる。日本と違い湿度が低く過ごしやすい気候で日中は日差しが厳しいが朝や夕方は過ごしやすくありがたい。

草原を歩きながら俺はこの世界で何をしたいのだろうとぼんやりと考える。目先のしたい事はいっぱいあるが、最終的にどうしたいの

かが解らない。突然この世界へ来てしまったのだ。それも仕方ないとは想うものの、どうにもすすきりしない気持ち心が心の中で蟠り燻り続けていた。

村の家々の暗い明かりがちらほらと見え始める。取り敢えず何か美味しい物でも食べれば気持ちも落ち着くだろうと、心情を希望的観測で蓋をする。思わず苦笑が出た。

「大丈夫。なんとかなるさ。」

1番星が南の沈みきらぬ空に輝いていた。

## 思考と魔法と考察（後書き）

なんだか暗い雰囲気が終わってしまいました。そんなつもりは無かったのですが。

## 旅立ちの準備

翌日、気持ちよく目覚めると1階に下りて、もはや習慣になりつつある朝風呂を頂くと体に残る僅かな眠気が取れた。風呂は夜混む為、朝に入った方がのんびり入れてお得感がある。やはり、風呂ならばゆっくり入りたいし。

この世界の人々はなんと言うか鴉の行水？みたいな所があつて夜だと順番待ちがあるためゆっくり入れない。そんな事を思いつつカウソタに戻って鍵を返して後ろのテーブルに座っていたオルデン達の所まで行って空いている席へと座る。

「おはようユウキ。」

「ああ、おはよう。」

「おはようさんユウキ。また朝風呂かほんと好きだな。」

「まあな、朝ならゆっくり入れるからな。」

「風呂なんて汗さえ流せばいいんだよ。所で今日はどうすんだ？」

「なかなか、風呂の素晴らしさが伝わらないな。折を見て風呂の素晴らしさを語ってるんだが。今日の予定か、昨日考えた事を聞いてみるか。」

「なあ、ここから1番近い都市ってどこだ？」

「何だ急に？。ここから近い都市といえば北に行ったところにマー

ズって名の都市があるが。」

「もしかして旅に出るのか?。」  
「オルデンが聞いてくる。やはりこの聞き方だとそうなっちまうよな。でもまあ、その通りなんだが。」

「まあ、調べたい事もあるし、都市は遠いのか?。」

「そうか。ここからならそう遠くないぞ?。まあ、歩きなら12日位で着くな。」

「馬車なら、5日位で着くぐらいだぜ。都市に着く前に3つ位村があった筈だったよな?。オルデン。」  
「ジエミドが聞くとそうだなと頷くオルデン。歩いて12日、馬車でも5日も掛かるのか。それで遠くないってどれだけだよ。時速4キロで歩いたとして、1日8時間で32キロ程度。12日で384キロか。計算すると尚解る遠さだな。」

「思ったより遠いな。結構な大荷物になりそうな気がするな。」  
「食料や衣服、そして野宿する為の装備も必要だし他にもあるのかもしれない。その所も聞いとかなないとイケないだろう。」

「それでもないぞ。食料は、そうだな6日分も在れば次の村まで充分持つしまたそこで買えばいい。困ったら魔物を狩ればいいしな。」  
「それもそうか。途中に村があるんだここらと変わらなければ食料だけでなく色々買えるだろう。あ、そういえば本気で走れば1日で走破できんじゃない?。登りであれだけの速さで走れるんだ時速40キロで走ったとしても、9時間ちよつとで着く計算だ。休憩入れても半日で着くな。まあ、それは置いといて魔物とか出るのに夜どうやって休むんだらうこれは聞かねばなるまい。」

「なあ、夜魔物出るのにどうやって休むんだ?。」

「あ?、簡易障壁に決まってるだろ?。」

簡易障壁って事は結界みたいな物か。どういった機構をしてるのか気になるな。

「簡易障壁?。どういう物なんだ?。」

「そりゃ、あれよ。布に簡易障壁の魔方陣が縫ってある奴だよ。旅する奴は必ず持つてる物なんだが。そんな事も知らないでどうやってここまで来たんだよ。」

「知らない物はしょうがないだろ。」

そう言っつて、お手上げの仕草をした俺は実物を見てみたいとオルデンにお願いするとオルデンは、ならこの際に自分のを買ったらどうだと言っつて来たので頷いておく。

それを買ったあとは、オルデン達に教わりながら旅に必要な物を買って揃えることになった。俺も朝食を食べ終え、準備をするために部屋に戻る。取り敢えず、金の入った子袋をこちらで買ったバックに入れる。

長剣は、持つて行く必要無いな。短剣だけで良いか、これは魔物の解体用に買ったもので刃渡りが25センチほどの片刃でコンバットナイフみたいに肉厚なナイフだ。それを腰のベルトに差しておく。

準備を整えて下に降りるとオルデンとジェミドがもう降りてきていた。3人で通りに出て最早慣れた道のりを露天の方へと歩き出す。

露天に着くと、店主に許しを貰ってジエミドが早速ひとつの折り畳まれた布を手に取り広げて見せた。それは、1メートル四方の厚手の布で60センチほどの魔方陣がにび色の糸で描かれたものだった。

「これに乗っていれば2人が両手を伸ばした位の簡易障壁が出来るんだぜ。」

「まあ、魔物に攻撃されたら3発位で解けるけどな。だから、熟睡は出来ないが無いですよ。攻撃されたら障壁が解ける前に戦える様にしておけよ。」

「そうオルデンが、補足する。便利な様でそうでもないな。だが、1人で旅するには必須だろうな。魔方陣は大きいものの3つの文字しか描かれて無く、魔素集積、状態維持、視えざる壁、としか描かれてない。と言っても縫い付けてあるが。」

「視えざる壁は障壁の事だろう、魔素集積は空気のように偏在する魔素を取り込んで魔方陣を発動し状態維持で障壁を維持する物かね。だがこれはどういう発動条件なんだ？これだと触れていれば常時発動している事になるがどうなってるんだらう？」

「さつき、乗っていれば使えるって言うてたよな。ってことは触れた時点で発動してしまうんじゃないか？」

「出て来た疑問をぶつけてみる。」

「いや、触っただけじゃ発動しないぞ。使う時には、魔力を流し込まなきゃならない。って言うても少量で済むがな。1回魔力を流し込めば1晩は軽く持つ。」

「んじゃ、止める時はどうするのか聞くと障壁を殴って壊せだそうなのかな。かなり無理やりだな。」



「んで、どうすんだい？。買うのか、買わないのかはつきりしてくれ。」  
露天の店主が長々と話す俺達に買うなら早くしなと急かすので、値段を聞くと貴銀貨1枚と銀貨2枚だった。それを聞いたジエミドがそれはちよつと高いぜと言い出し、店主と値段交渉を始めてしまった。

俺はそのまま買っても良かったんだが、結局ジエミドの勢いに押された店主は貴銀貨1枚で良いと疲れた様に言った。少し同情しながら支払いを済ませ次の店へと移る。ここでは旅向けの保存食などを商っている所で干し肉や乾燥させた果実、カラカラに乾いたパン、塩や香辛料などが置かれていた。

取り敢えず必要無いと思うがオルデン達の手前、買わないわけにも行かず6日分の干し肉や

乾パンもどきそして塩と干しぶどうをひと房買う。代金の銀貨6枚を払い、試しに干し肉を少し齧るとかなりしょっぱく高血圧になりそうな味だった。

干し肉などはスープ等に加える物らしい。スープに味付けしなくても済むようにかなり濃い目に味付けされている。そのまま食べるには向かないみたいだ。そこを離れて古着屋に向かい服の予備と薄い毛布と布袋を買う。

その他の厚底のフライパンなど調理機器のほか細々とした物を買ひ、一通り揃える事が出来たので、買い物が終わらせギルドへと戻った俺達はジエミドの部屋で買った物を確認しながら話す。

「これで、大体の物が揃ったな。っで？、何時出るんだ？。」

「明日には出ようかと思ってる。こう言う事は決めたら早い方が良  
いって相場が決まってるし、ゆっくりしているとめんどくさくなりそ  
うだな。思い立ったら吉日なのさ。」

そう笑って言うと、それもそうだなと返ってきた。そっちはどうす  
るんだ？と聞くと、こっちはあと10日か程したら南に向かつて旅  
にでるんだそうだ。こうなると中々所か死ぬまで逢わない可能性が  
高そうだ。

「んじゃ、今まで大分世話になったからな。今晚は俺のおごりで飲  
もうぜ。」

しんみり別れるのは性に合わないし、最後はパーッと騒いで楽しく  
したいしな。それに世話になったのは間違いないし。

「おつ、いいな。それじゃ、下行くか。そろそろ良い時間だしな」  
時計を確認するとまだ夜と言うには少し早いが結構良い時間だ。2  
人と連なって下に行きテーブルに着き酒と料理を頼む。先に酒が来  
たので乾杯して一気に飲み干すと酒の追加を頼む。

「あんまり飲みすぎるなよ。まあ、言っても無駄だろうが。」  
オルデンが真面目にジェミドと俺に注意するが俺達はそんな注意な  
どどこ吹く風でクレアさんが持つて来た酒をまたも凄い勢いで飲み  
干してぶっはーと一息つく。そこに料理が運ばれてきて食べ始め、  
よく食べかなりの量を飲んだ俺達は明日の二日酔いを気にする事無  
く賑やかも騒がしい夜が更けていくのだった。

## 旅立ちの準備（後書き）

お久しぶりです。中々進みませんがよろしくお願いします。

## 初めての旅の行方は

空高く馬肥ゆる秋。節句だったかどうかうる覚えだが、高い空に浮かぶ白い雲がなんだか気持ち良さそうだ。ただ、今の季節はまだ夏だが……。オルデン達と離別したのは今日の朝そして此処は目的地である城塞都市マーズまで半分と言った所だ。思ったより時間がかかっている物の旅自体は順調そのものだ。

当初半日で着くかと思われたマーズだったが、街道から離れて走っている草原が広がる大地では何も目標となる物が無く途中かなりそれていたらしく迷子になりかけてしまった。2時間近く彷徨い漸く街道に帰ることが出来た。(そこっ！間違いなく迷子だって言わない！！)さすがに街道で全力疾走は目立ちすぎるし諦めたのだ。

木陰に漏れる日差しと緩やかな風が心地よくなんだか眠くなってきてつい、うとうととしてしまいそうになる。今は昼過ぎを過ぎたところで先程簡単な昼食を食べたところだった。木に背を預け食休みとばかりに身体を伸ばす。胃に血液を取られたせいか疲れても無いのにけだるい空気が辺りを侵食してしまったかの様だった。

街道から少し外れているとは言え村に近いせいかわ麦畑が見えた。この辺りの主要な穀物なのだろうその青い穂がそよ風に揺れている傍らには百姓だろうか雑草を抜いている姿も見える。元の世界となんら変わり無い牧歌的なその姿に、なんとも言えない気持ちの中心で渦巻くのを感じる。これにあえて名称を付けるとしたら哀愁かそれとも郷愁か、いまいち判別の付かない心境を胸に大きく背伸びびをして勢い良く立ち上がる。時計を見れば木陰で休憩をしてから30分程経過していた。

すぐ傍に下ろされたバツクから荷物がはみ出ている。慣れていないせいか荷物が何処に在るか判らない物があり引つ掻き回している内に整理してあつた物まで判らなくなると言う悪循環が起こつていた。もつと判りやすく整理するべきなのだが、ここでは不味いと思ひ直しどこか宿を取るべきと考えが至る。そう決まれば何処に泊まるかなのだが、幸いと言うべきか歩けば20分本気で走れば1分つと言つた所に村が見えた。

まあ、走らなくても充分明るい時間帯だし何よりこんな所で目立つ行動をする必要も無いしな。はみ出た荷物を無理やり積み込み持ち上げて周りを見渡し忘れ物が無いかを確認して歩き出す。街道に戻つてしばらく歩き街道からはずれて村に向かう道を歩いていると、後ろの方からガラガラと何か軋むような音が聞こえてきた。振り向くと2頭立てのおそらく行商人だろう荷馬車がゆつくりとではあるが近づいてくるのが見えた。

あと、5m位になって御者席に座っていた中年ほどに見える細身の男が声を掛けてきた。

「おや、冒険者様かい？この先の村になにか出たのですかな。」

背に背負つた剣を見て冒険者だと判断したのだろう。柔らかな笑顔を浮かべつつ探るようなその目を見てなんとなく意図を理解する。この先の村に魔物が出てその対処をしに来たのかと考えているようだ。実際そんな事はまったく無い為素直に目的を告げることにする。

「いえ、一晚の宿を借りにですよ」

「ほう。なかなか学があるようですな。いやあ、冒険者は荒くれ者ぞろいでしょうあなたの様なお人は中々居ませんでな、不躰でした

な失敬。」

向こうから尋ねられて応えたのだからこちらから何か聞いた方が良さそうだ。商人は一般的に話にも対価を要求する。それは世間話のように見えても何かしらの判断材料になる場合が多いからなのだが、今回の場合は行商に行く村に冒険者が行く事から何かしらの魔物が出た可能性を想定しリスクと何かしら売れそうな物を考えて聞いてきたのだろう。まあ想像だが、あながち間違いとは思えない。そんなわけで軽く何か聞くとしよう。

「そんなことも無いですよ。ところで、この先の村には何か美味しい物でもありませんか？」

「この先の村にはこれと言って特産と言う物も無くあえて言えば小麦位ですな。ですが、それはこの辺一帯の事ですしねえ。」

ふむ、何もなしかまあ一晩だけ我慢すれば済む事だし諦めるか。次の村までそんなに遠くないって話だったし、たしか普通に歩いて半日も掛からなかったはず。

「そうですね。残念です」

そう言つて少し大きさに肩を落として見せた。それを見た行商人は商売の好機とばかりに何か足りない物があつたらよろしくとだけ言う速度を上げて行ってしまった。それを見送りつつゆっくりと歩く。左右には村に向かって小麦畑が延々と続き空から降り注ぐ太陽の強い日差しがじりじりと肌を焼く。何かしらの対策を考えた方が良さそうだと考え上を向く。

そこには本格的な夏の季節を迎えて蝉の鳴く音だろうか。喧しくも

美しい様々な音がそこかしこから聞こえてくる。なんだか懐かしい蝉の声を聞き、ふと昔行つた夏祭りを一瞬幻視する。そして無性にりんご飴が食べたくなつた。そんな郷愁とも取れる気持ちを頭を振って追い出す。

この世界では砂糖は貴重品だ。別に砂糖が無いわけではない物のこの大陸の南部でしか栽培されていないらしく、この辺りまで輸送するとべらぼうな値段になってしまう。なぜなら、交通インフラの整つた元の世界と違い下手すれば何ヶ月も荷車を引いて持ち込むか難破の可能性のある船による輸送しかない。しかも盗賊や魔物も居る世界でだ、護衛を付けないとたどり着けるかも定かではないそうになると貴重品になるのは当たり前だつた。

だから北に行けば行くほど砂糖だけではなく胡椒などの南部で産出される調味料は高くなる傾向があつた。砂糖の代用としては蜂蜜があるが、蜂も様々な種類がいてミツバチ程の大きさから50センチ程の蜂の魔物までいる。蜂の魔物から取れる蜂の巣はかなり巨大で大きい物だと蜜だけで樽ひとつ取れるらしい。だが、かなりの危険が伴つのは目に見えている只でさえ大きな蜂が大群で襲つてくるのだ。殺虫剤が無いこの世界では決死の作業になるだろう。

連想ゲームのように次々とどうでもいい事を考えながら歩いているともう村の柵がすぐそこまで来ていた。

そこはココラ村よりも大分こじんまりとした村で木造の家々が並んでいた。村の入口から馬車が走れる程の踏み固められた道をおのほりさんよろしく眺めながら歩くとやはり小さい村の為かすぐに中心にある建物に着いた。看板からギルドだと判る。はじめて入る建物に多少の緊張をしながら扉を潜るとすぐにカウンタが目に入った。おもむろに周りを見渡すとココラ村のギルドと違い狭い店内はカウ

ンタとその右側に奥へと続く通路しかない。

素泊まりの民宿みたいな感じなのかね。っと心の中で1人ごちりと  
りあえずカウンタに近づくと誰か居なかった。「誰かいませんか」  
とそこそこの声量で呼んでみる。すると奥のほうから「少し待って」  
っという言葉が返ってきた。待つ間にカウンタの横に張っている掲  
示板を眺めていることにした。そこには全体的に張られている依頼  
書が少なく閑散としていて、殆どは採集系の依頼ばかりだった。

5分程だろうか、依頼書を眺めていると後ろの方に気配を感じて振  
り返る。そこには、40歳くらいのふくよかなおばさんが少し驚い  
た様子で立っていた。

「なにか？」

取り敢えず聞いてみる。おばさんはすぐに驚いた表情から笑顔にな  
りこつ言った。

「いやなに、久しぶりにホントの冒険者が来たからね。少し驚いた  
のさ、この辺はたいした魔物は出ないし冒険者が寄り付かないから」  
おばさんは寂しそうに笑うと「っで？どうするんだい？」と聞いて  
きた。俺は宿に泊まりたいと返すとそれなら銀貨5枚と半銀貨1枚  
だよと言われた。安いなと思いつつ払うとこの宿について、色々と  
教えてもらった。このギルド兼宿はやはり素泊まりのようで食事は  
各自用意してくれと、あと風呂が無いみたいだ。正直かなり残念だ  
が仕方ないお湯を貰って身体を拭くしかなさそうだ。

部屋の鍵を貰いそれと云って畳んだシートを受け取った。これは  
自分でひけと言う訳ですかおばさん。カウンタの右にある通路の先



は4部屋しかなく奥の左側の部屋に入ると4畳程しかない部屋だった。東側を向いた窓に粗末なベットと壁に備え付けられたチェストしかない質素な部屋で長期間の滞在には向かなそうだ。腕時計を確認するとまだ3時を少し廻ったくらいでまだまだ時間がある。取り敢えず、荷物を降ろしベットにシーツを掛けて座る。

んっ中々の硬さだ。まあ、地面よりはマシって程度だな。バックに手を伸ばし目的だった整理をすることに。1度中身をベットにぶちまけて再度詰め込んでゆく。判りやすくなおかつ取り出しやすいように気を付けながら慎重に選んでいった。だが、それも1時間もしない内に終わってしまう。窓から外を見ると、まだまだ日は落ちそうに無い早々にする事を失った俺はバックをベットから放り出しベットに寝転がる。

さて、何をするか。といっても俺が出来ることなどたかが知れている訳で、冒険者している者がする事と言ったら依頼を受ける位しかないんだがな。そんな自分に苦笑しつつひとつ依頼でも受けてみるかと立ち上がりカウンタまで向かった。その時、俺はこの夜がとも長くなることを知る由もなかった。

## 初めての旅の行方は（後書き）

遅ればせながらあけましておめでとございます。年末年始の仕事も一段落してやっと通常運転になりました。更新の方はゆっくりになると思いますがよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3578y/>

---

俺がここで生きるわけ

2012年1月10日00時50分発行